

第21期考古学セミナー（2019年度）

—縄文時代後期の山形—

第2回講座

講義④

庄内の縄文時代後期の遺跡

うきたむ風土記の丘考古資料館館長

渋谷 孝雄

令和元年10月6日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

庄内の縄文時代後期の遺跡

渋谷 孝雄

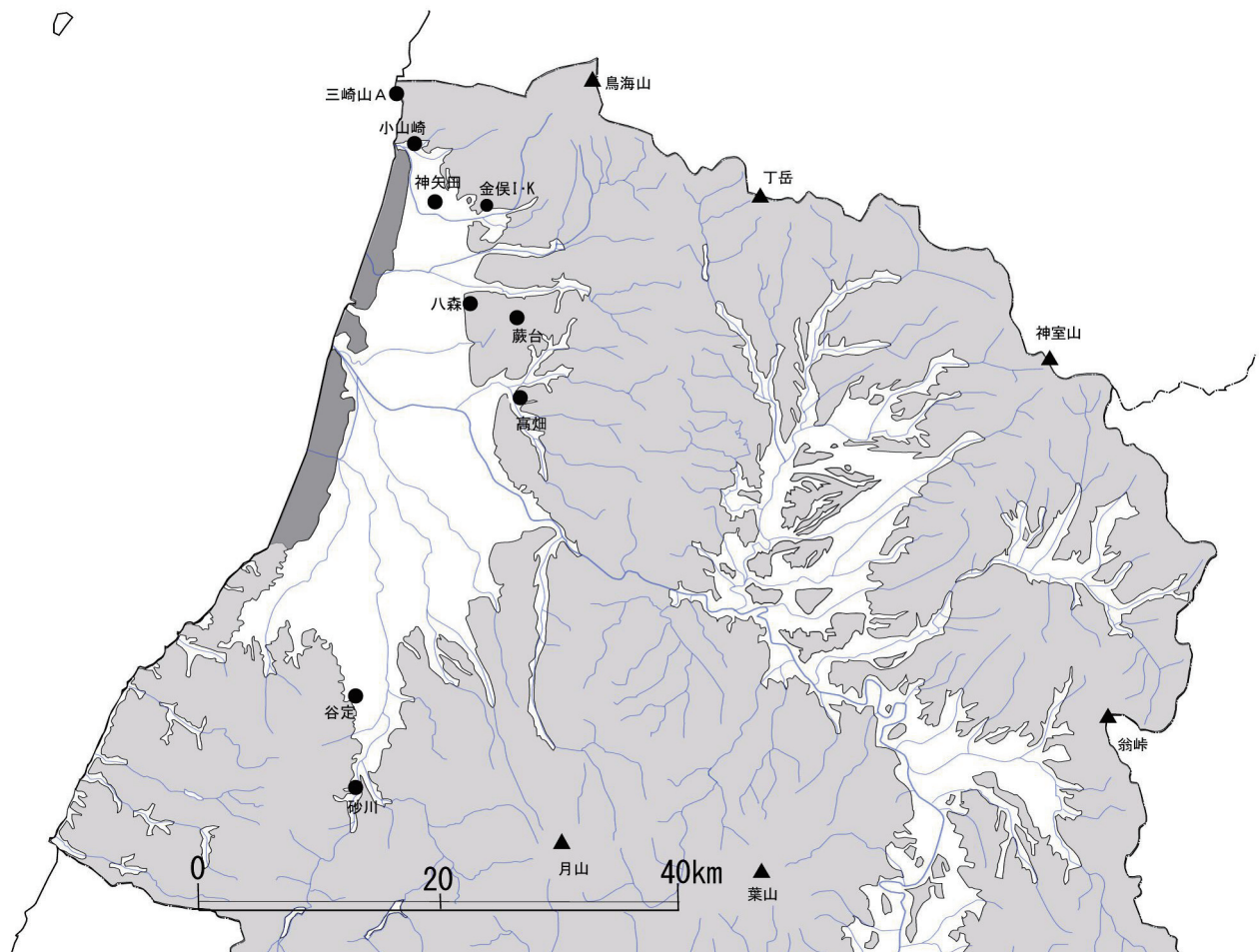
はじめに

庄内地方では、発掘調査が行われた縄文時代後期の遺跡は多くはない。庄内北部では1954年に遊佐町三崎山で発見された青銅刀は縄文時代後期に渡来したと考えられた(柏倉1960)。1957年に、旧平田町の高畑委遺跡で縄文時代晩期の多量の土器と共に、後期の土器も出土した(佐藤2004)。庄内南部では1968年に発掘された鶴岡市谷定遺跡が従前から後期の遺跡として知られていた(佐藤1968)。その調査成果が纏められていると聞かすが、まだ、刊行されてはいない。1970年、71年にはほ場整備事業に伴い遊佐町神矢田遺跡の発掘調査が行われ、住居跡1等が検出され、中期末から弥生時代までの土器が出土した(佐藤・佐藤1971、72)。

1973年以降、県教委による緊急発掘調査が本格化するが、庄内地方では平野部のほ場整備事業による調査が多く、平安時代の遺跡の調査が中心となり、縄文時代の調査は多くはなかった。このような中で、1981年には旧朝日村で農村基盤総合整備事業に伴い、朝日村教育委員会によつての砂川遺跡の調査が行われ、後期後葉から晩期初頭の竪穴住居跡4棟、土坑6基が検出され、中期後葉から晩期後葉までの土器が出土した(佐藤他1984)。

1992年に遊佐町金俣I・K遺跡が、93年には旧八幡町の蕨台遺跡で鳥海南麓農地開発事業に伴う発掘調査が行われ、前者では後期の遺物が、後者では後期初頭の集落が検出されている(長橋・水戸1993、斎藤1994)。

庄内の縄文時代後期の遺跡位置図



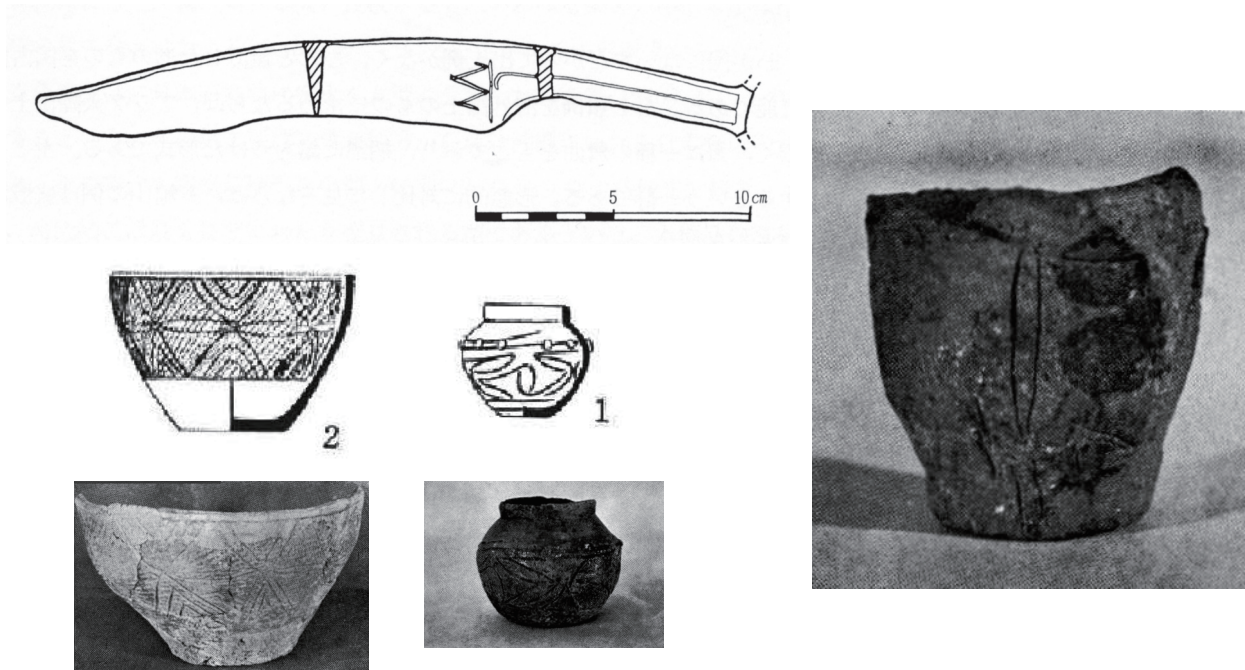
1994年には旧朝日村の中期後半が主体となる集落跡の野新田遺跡で1棟の住居跡から後期前葉の土器が出土している(伊藤、黒坂1996)。

1995年から始まる遊佐町小山崎遺跡では18次にわたる発掘調査で、後期の竪穴住居跡、水辺の遺構とそれを繋ぐ道路道路などが検出され、低地部分からは土器や石器に加え、多量の動植物遺体などが出土した(渋谷1997、大川他2015他)。丸池遺跡も小山崎遺跡に包括される。

以下、調査の古いものから、その概要を記す。

1 三崎山 A 遺跡

遊佐町大字女鹿字三崎山にあり、標高70mの凹凸のある溶岩台地上に立地する。一帯は鳥海石の採石地で昭和29年に青銅刀子が発見された。全長26cm、内反りで刃渡りは16.6cm、最大幅3.2cm、柄は環状をなしていたと考えられるが、欠損している。刃と柄の境界に鋸歯文が描かれている。遺跡からは縄文時代中期後葉から晩期までの土器があるが、青銅刀子が出土した付近には後期中葉の土器が出土している(柏倉1960)。



三崎山 A 遺跡の青銅刀と土器

2 高畑遺跡

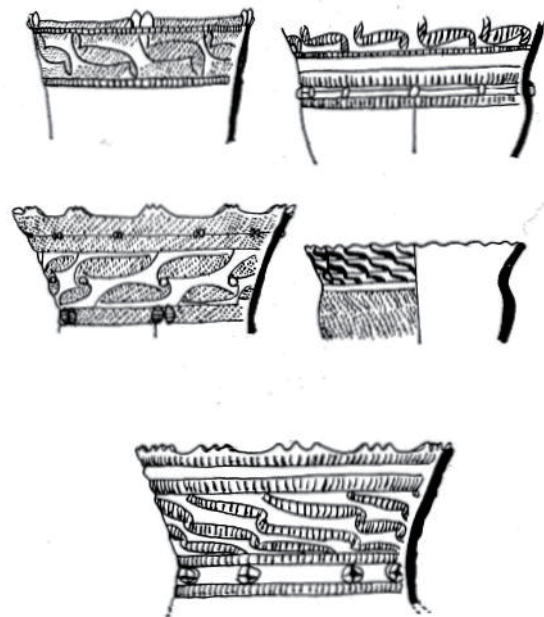
酒田市大字田沢字長根に所在する。中野俣川の左岸、第2段丘上に立地する。明治11年に松森胤保が大正19年には阿部正己が発掘調査を行い、昭和29年に柏倉亮吉、酒井忠純、致道博物館が、昭和32年には平田町教育委員会が発掘調査を行った。昭和32年の調査は中学校の建設前に行われたもので、この工事により遺跡は壊滅した。長径6mの竪穴住居が検出され、後期後葉の新地式から晩期前・中葉の大洞B、BC、C1、C2式土器が出土した。特に晩期に多くの完形土器がある(佐藤2004)。



調査の様子

器形\所蔵	A	B	C	D	合計	
深鉢		3			3	
鉢	中形	6	4	1	1	12
	小形		12			12
浅鉢		4			4	
台付鉢	1	3	1		5	
皿		3			3	
台付皿	1	6			7	
壺	8	11	2		21	
甑		4			4	
注口土器	8	5	5	2	20	
香炉形土器		2	1		3	
器台			1		1	
合計	24	57	11	3	95	

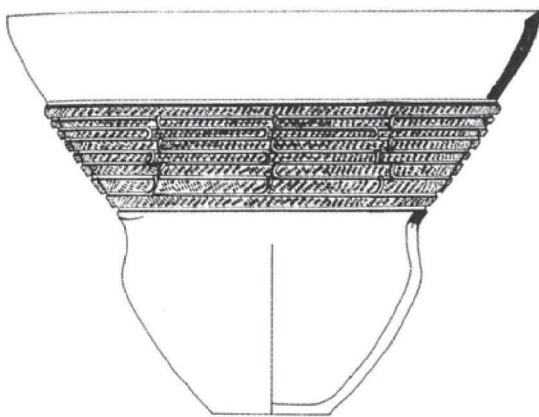
※所蔵者A:平田町コミュニティーセンター・
B:致道博物館・C:山口楨一・D:佐藤忠



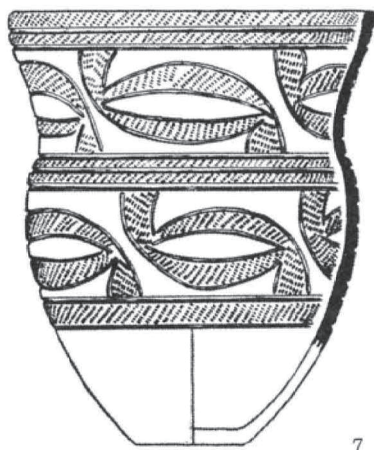
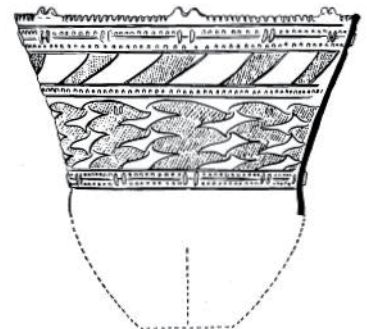
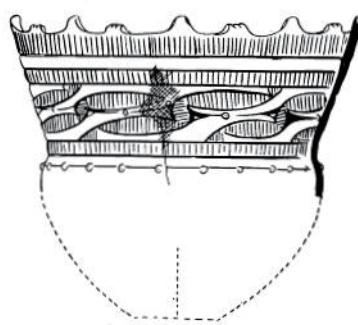
高畑遺跡の後期後葉の土器

3 谷定遺跡

庄内平野の東南部の鶴岡市谷定にある。1968年に致道博物館が発掘調査を行った。11個の川原石で囲まれた炉と柱穴7個からなる径4.7mの住居跡が検出されている。土器は後期中葉から晩期初頭まで出土したが、最も多いのは後期後葉の瘤付き土器である。



後期中葉加曾利B1式



後期後葉の土器

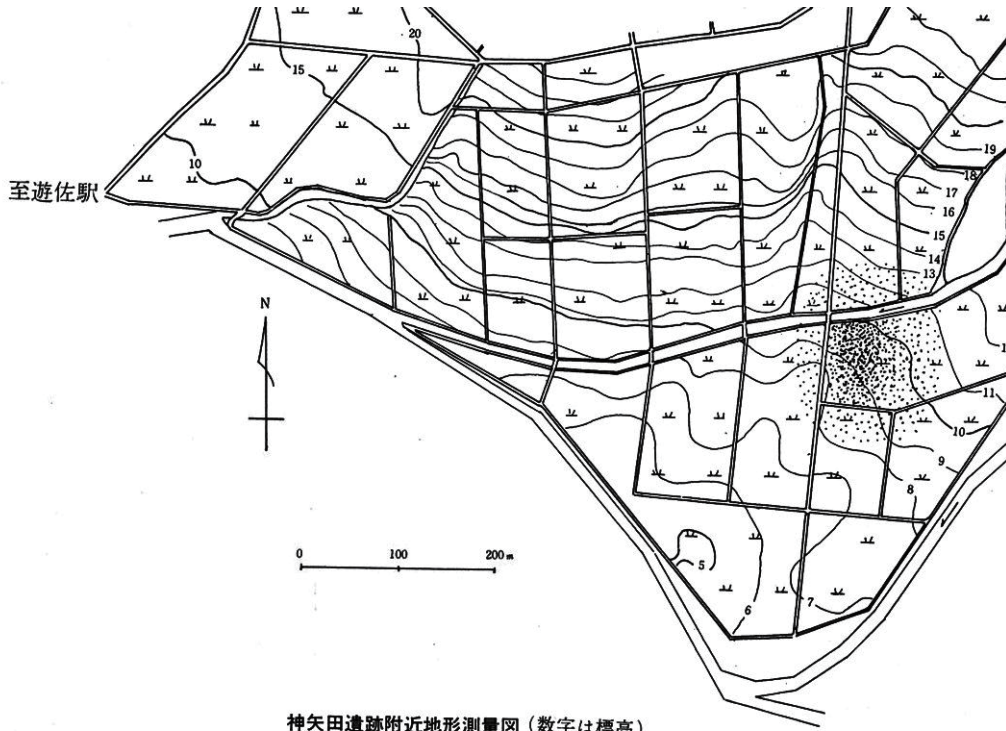


谷定遺跡出土後期縄文土器中葉～後葉の土器

4 神矢田遺跡

ほ場整備事業に伴って昭和45・46年に町教委が主体となって佐藤禎宏氏佐藤鎮雄氏の担当で発掘調査が行われた。後期末葉と晩期後半の住居跡が各1棟検出されている。前者の住居は直径6～7mの中に17本の柱穴が並び屋内に直径94cmの円形の石囲い炉が検出された。後者は直径4.2mの中に9本の柱穴が並び、中央部に地床炉が築かれていた。

目立った遺構は少なかったが、出土した土器は中期末葉から弥生時代の1群～17群までの土器型式がほぼ途切れることなく連続しており、極めて長期間営まれた遺跡であるといえることができる。

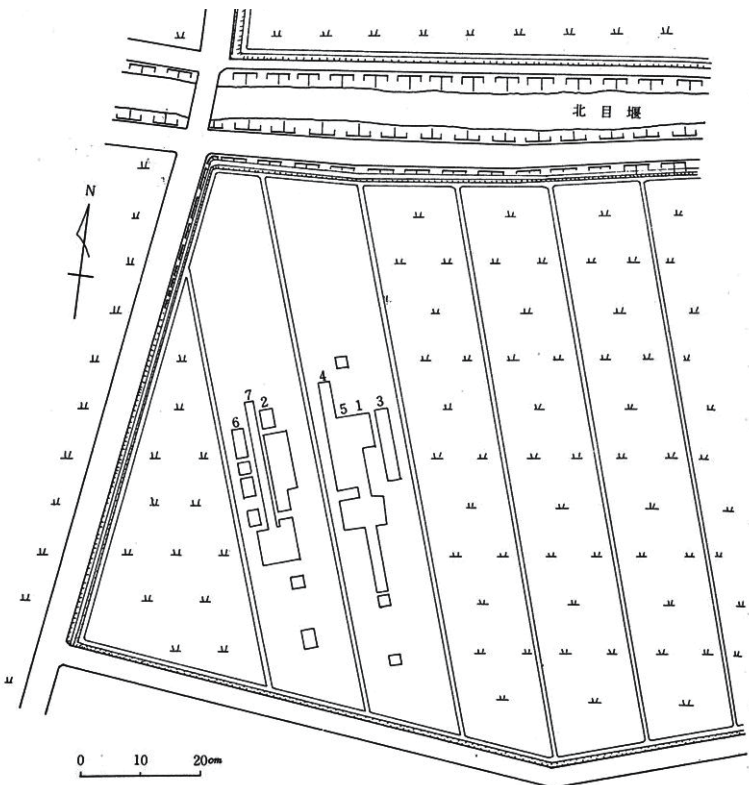


神矢田遺跡附近地形測量図(数字は標高)

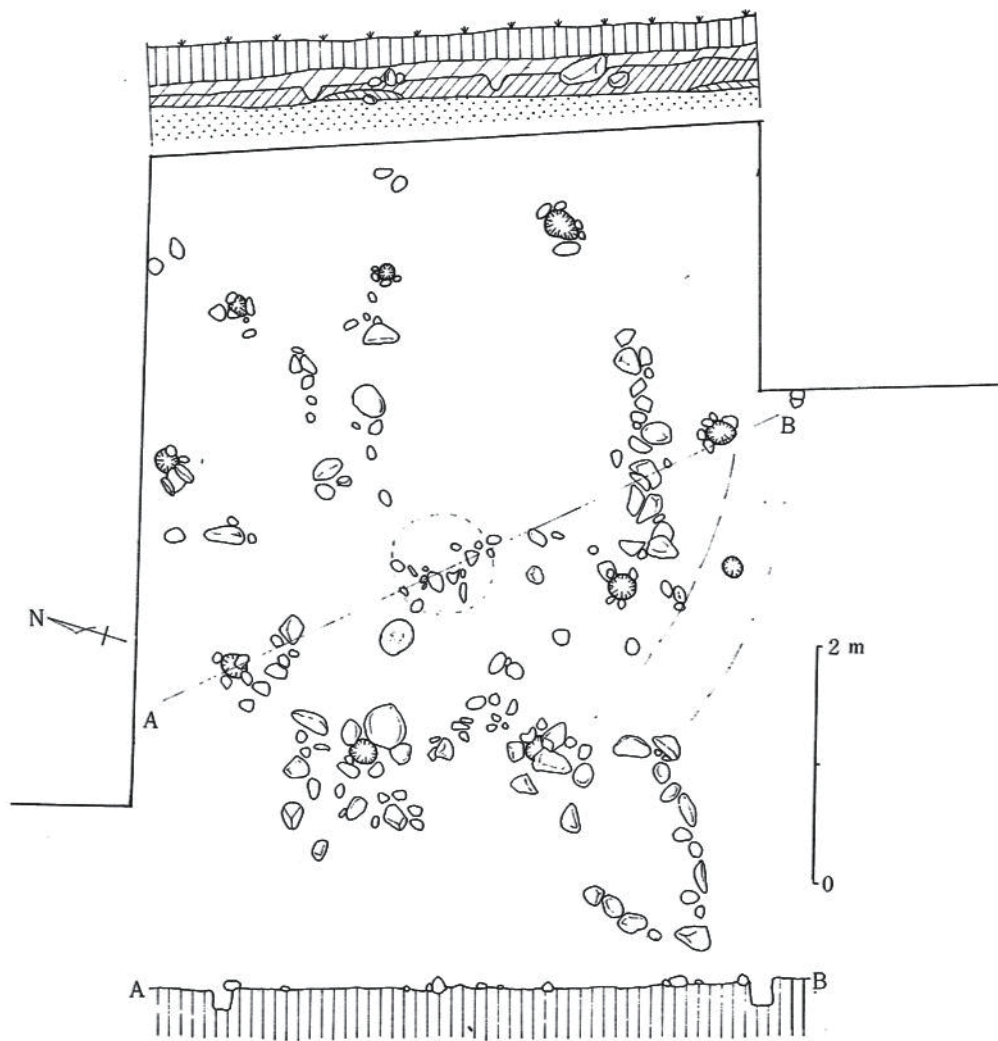
遺物散布状況

年代順に以下のような後期の土器が出土している。

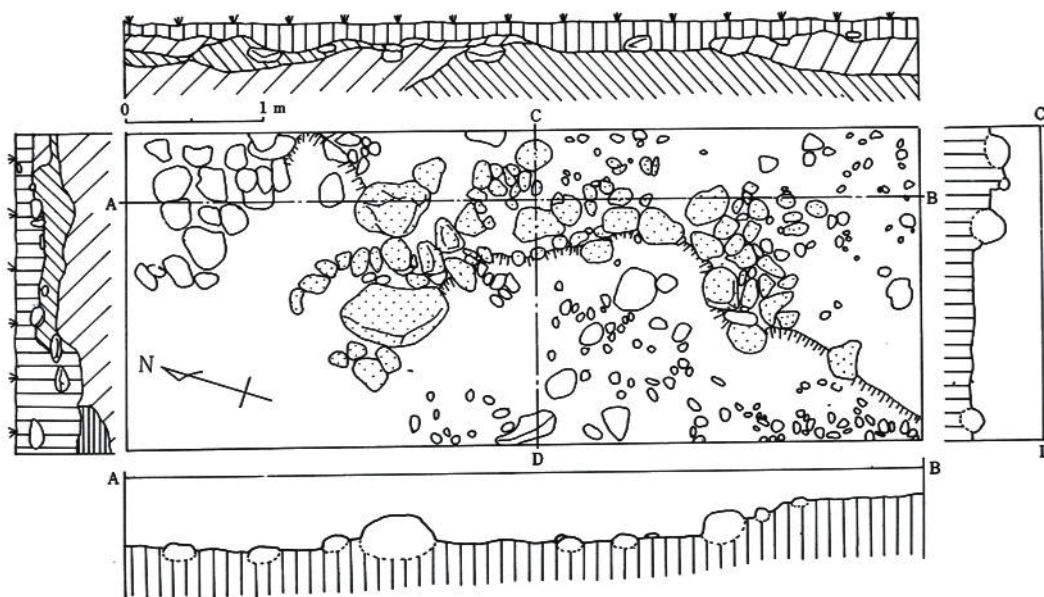
第3群土器：堀之内1式・南境式、第4群：堀之内2式・十腰内1式、第5群：加曾利B1式・十腰内2式、第6群：加曾利B2式・宝ヶ峯式・十腰内3式、第6群b：加曾利B3式、第7群：瘤付第1段階・新地1式、第8群：瘤付第2段階・新地2式、第9群：瘤付第3段階・新地3式、第10群：瘤付第4段階・新地4式。



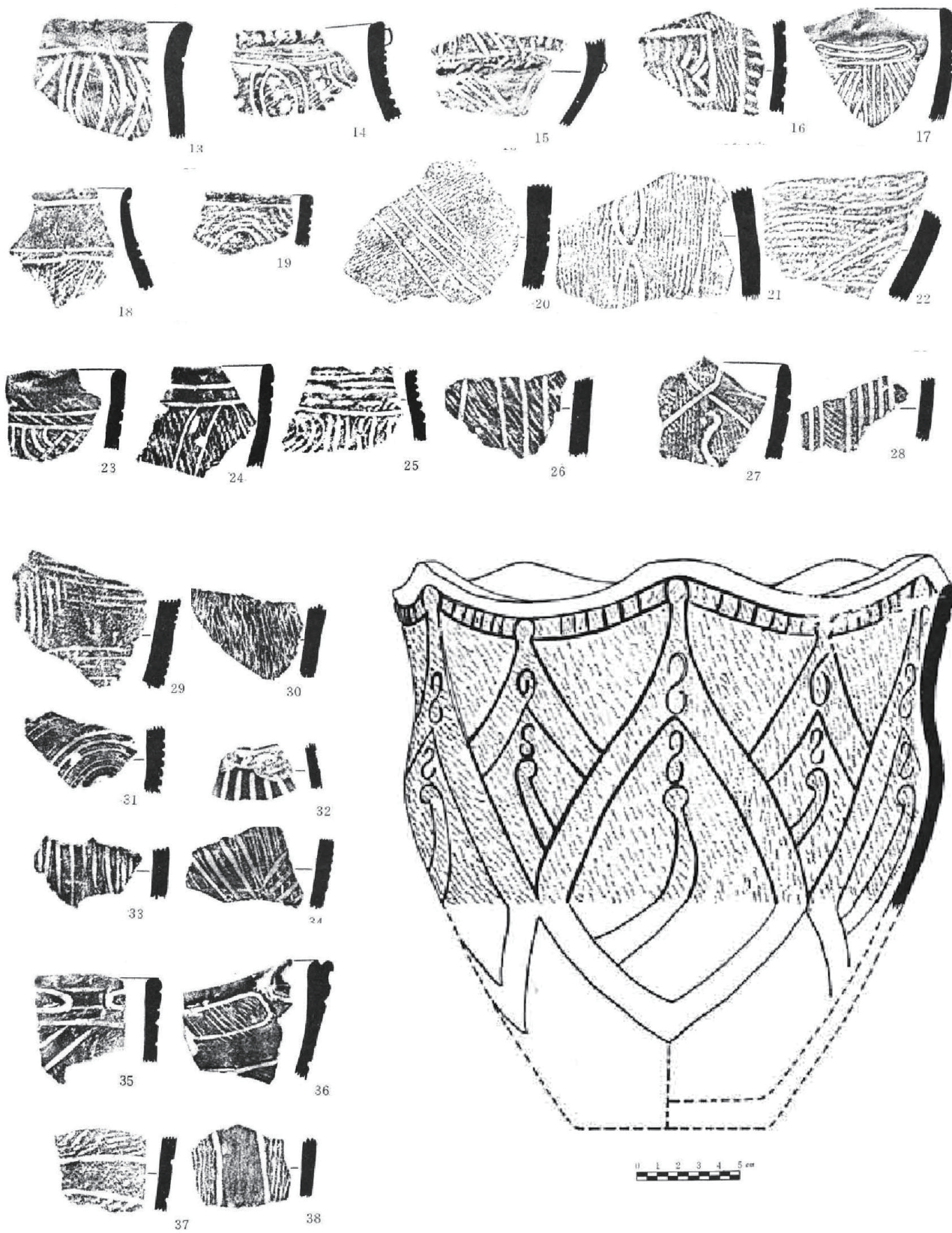
調査区配置図



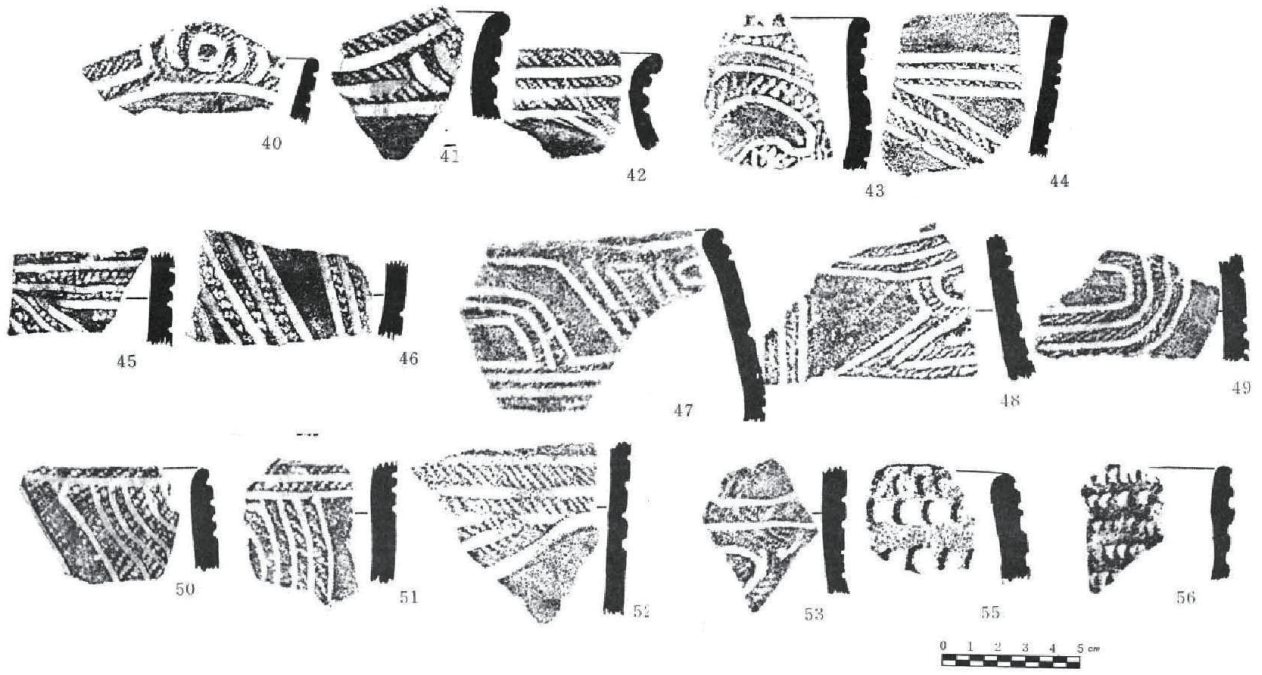
第2号住居跡実測図 (右下第1号石組)



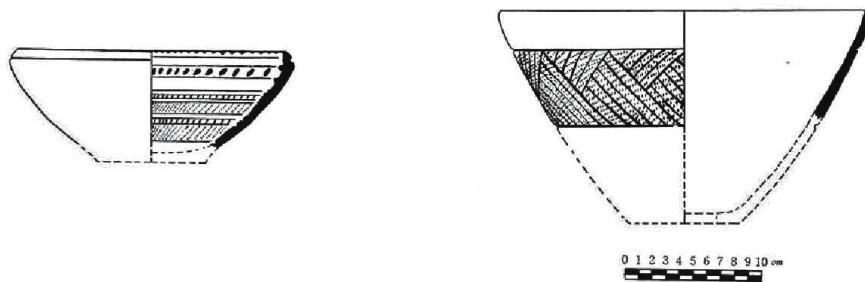
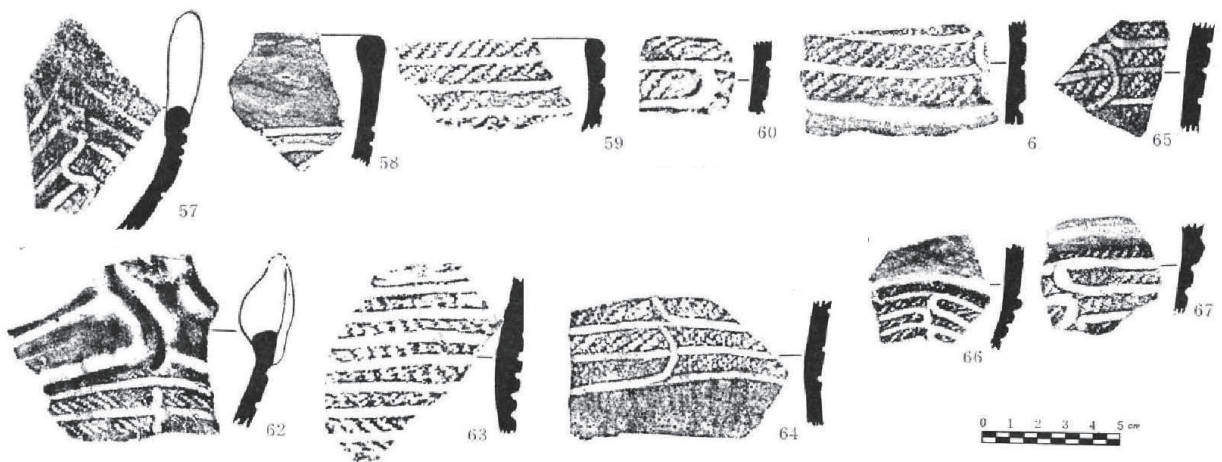
第7トレンチ北部第2号石組実測図



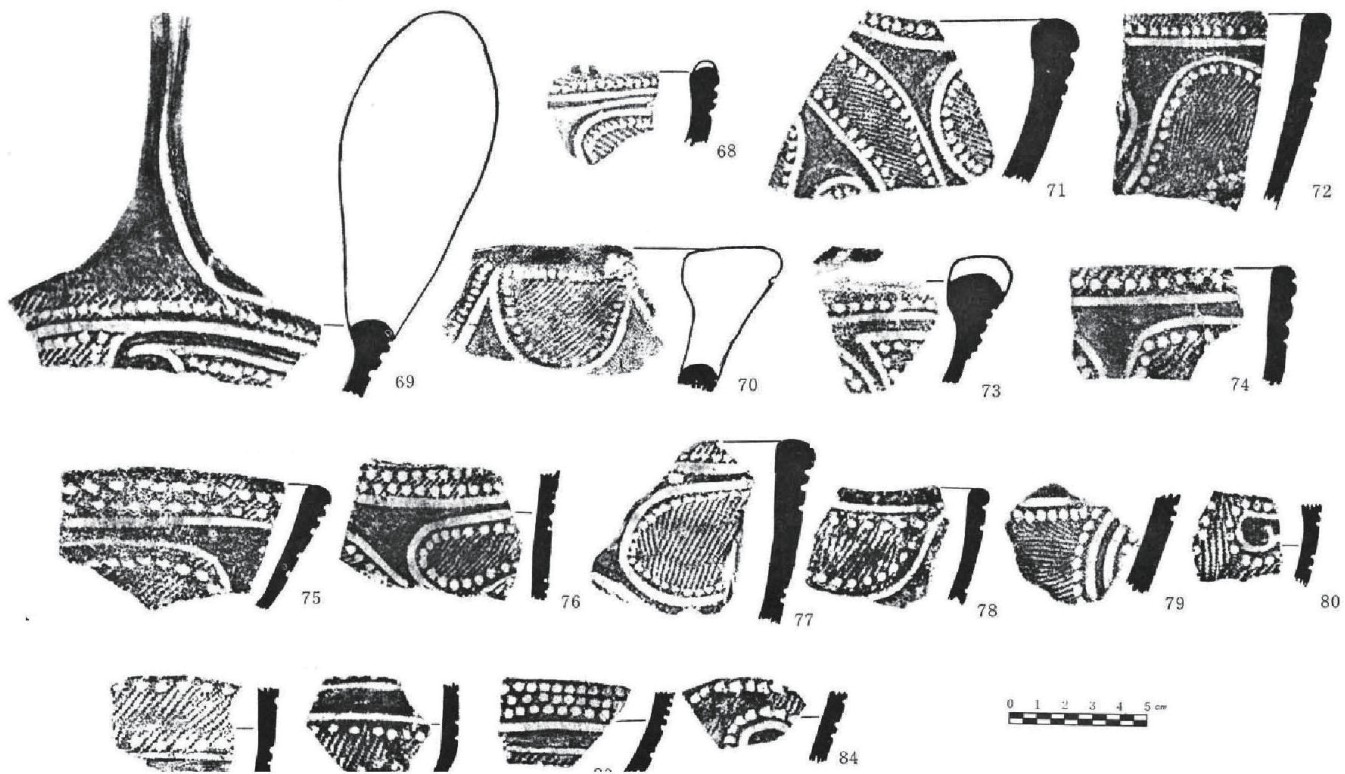
第3群土器



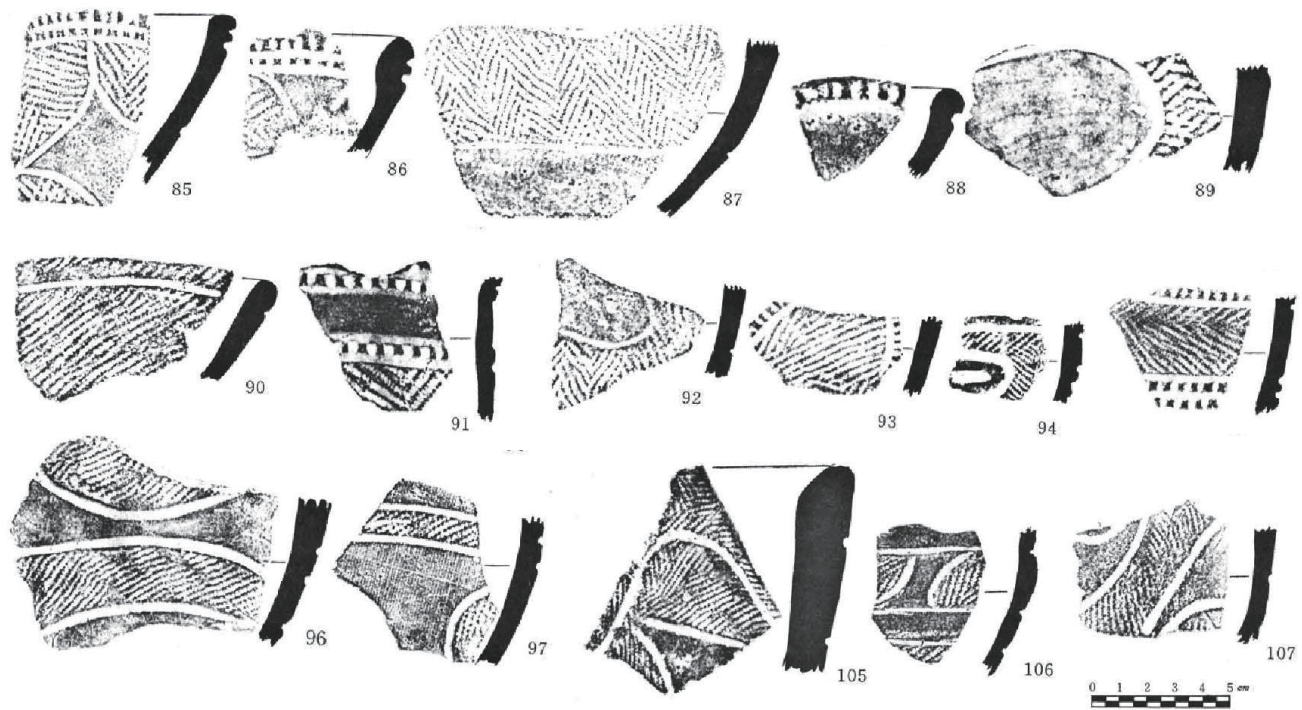
第4群土器



第5群土器



第6群土器



第6群b土器



108

109

110

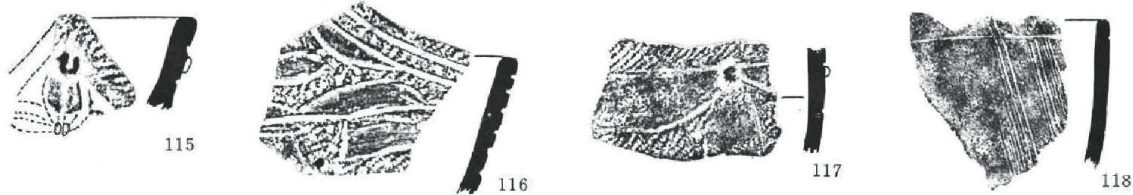
111

112

113

0 1 2 3 4 5 cm

第7群土器

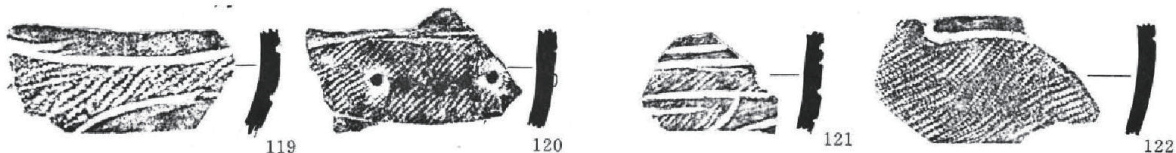


115

116

117

118



119

120

121

122

0 1 2 3 4 5 cm

第8群土器



124

125

126

127

128



129

130

131

132

0 1 2 3 4 5 cm

第9群土器



142

143

144

145

146



147

148

149

150

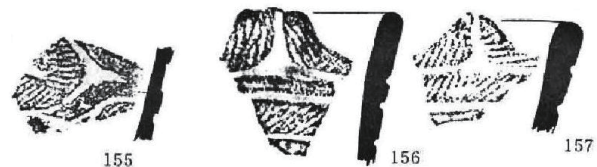
151



152

153

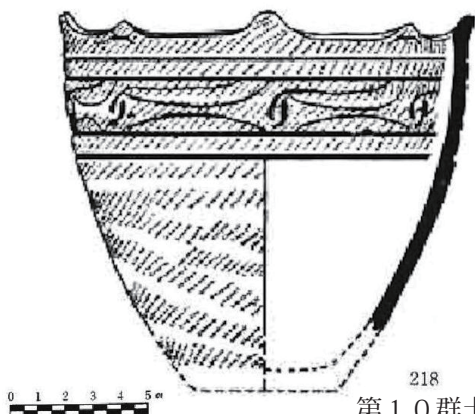
154



155

156

157



218

第10群土器

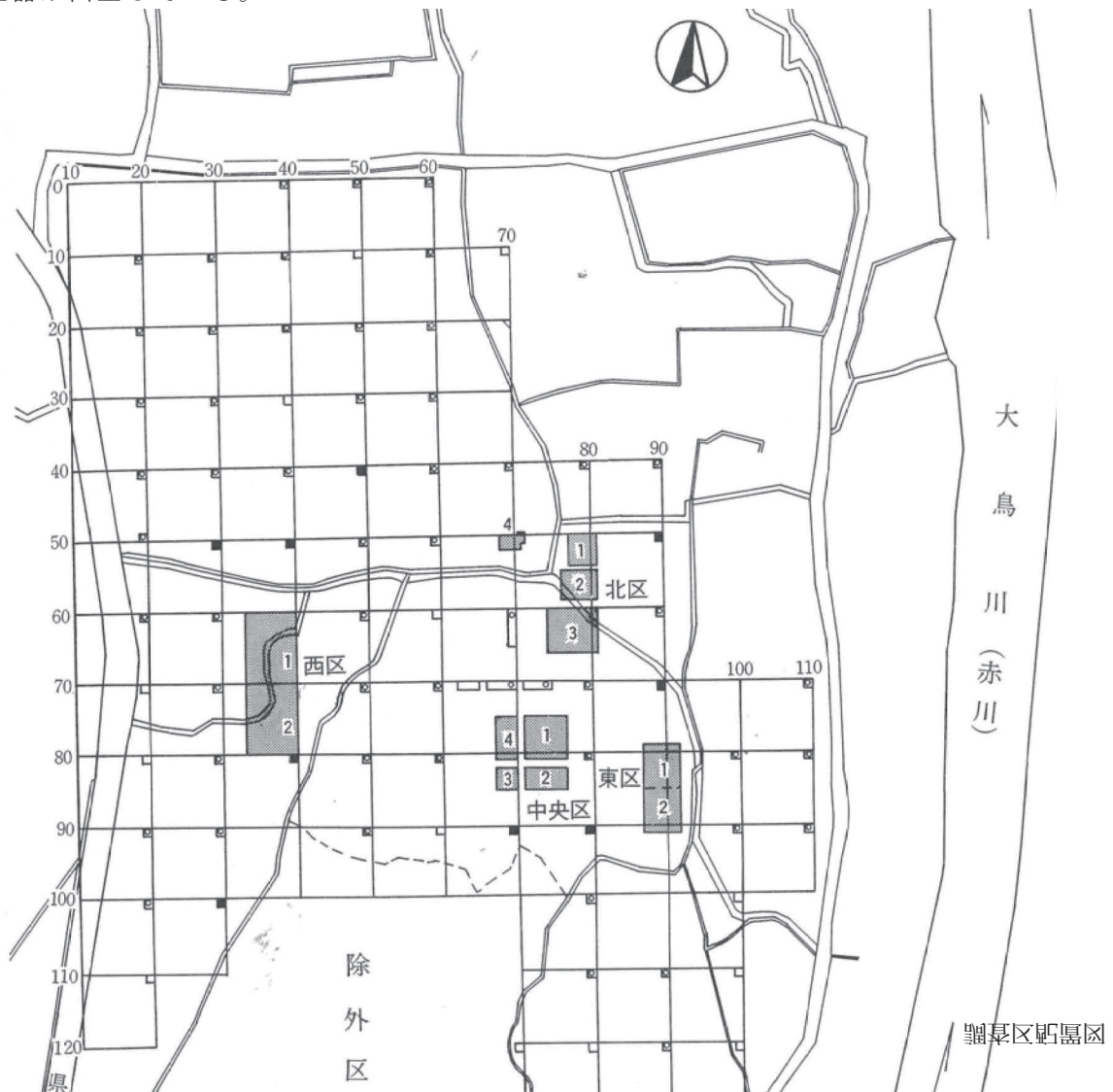
5 砂川 A 遺跡

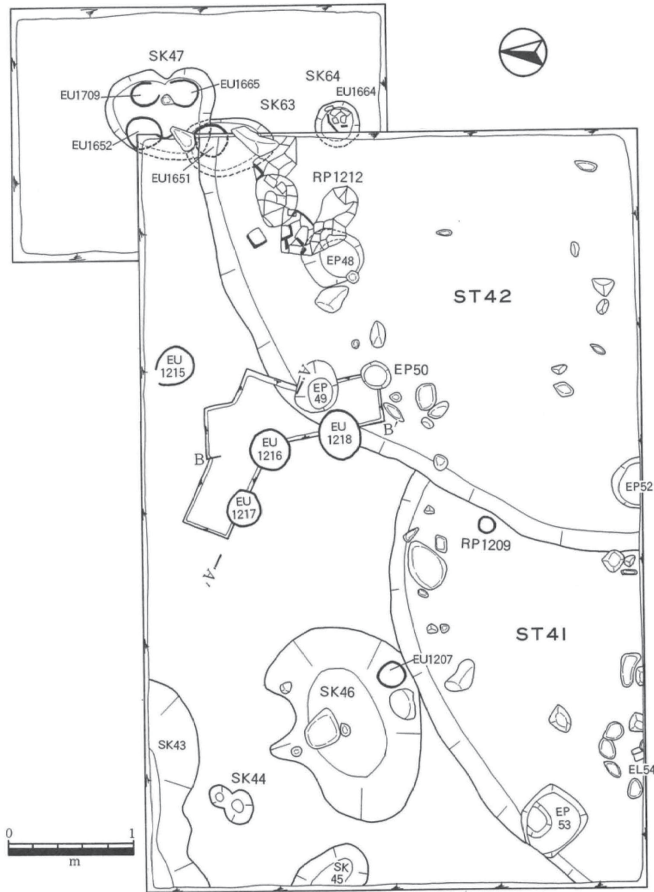
鶴岡市大字砂川字山崎に所在し、大鳥川のやや下流部の左岸に位置している。ちょうど戸沢川と小芋川にはさまれた間の模式的な河岸段丘上に立地している。調査対象地区は大部分が水田となっていたが、畑や茅地、それに2本の水路も存在する複雑な地形となっていた。これまでも耕地整理や畑地の水田化、暗渠排水工事などで、何回かの工事が施工されてきた。ただ、段丘上位(西側)と段丘下位(東側)の精査区に当たる地点は、半分以上が畑地であり、層序も乱れが少なかった。遺跡の標高は120m前後である。

1981年に旧朝日村で農村基盤総合整備事業に伴い、朝日村教育委員会検出された遺構は竪穴住居跡7棟、土坑13基、埋設土器5個、配石遺構5基である。土坑13基は、埋甕をもち土壙墓としての性格を有するもの5基、性格不明なもの7基、風倒木痕と考えられるもの1基の内訳になる。また単独に埋設された埋甕(埋設土器)が5個検出された。

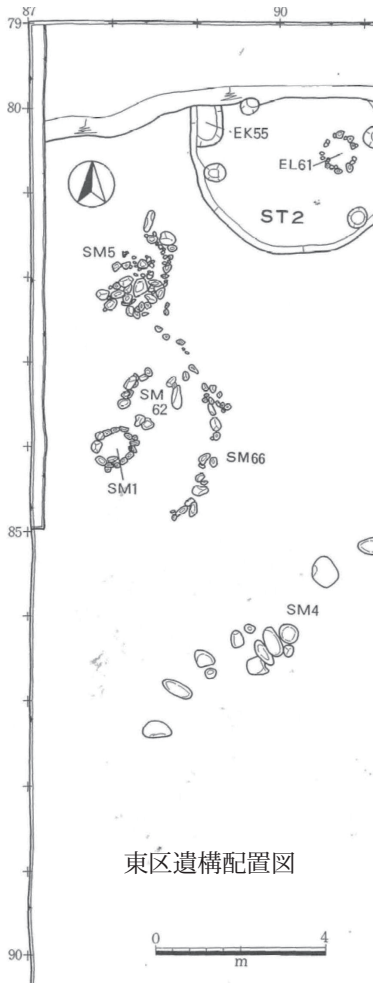
I期(縄文時代中期末)は土坑1基、II期(縄文時代後期後葉新地2~3式)には竪穴住居跡2棟、土壙墓2基、埋甕3基がある、III期(縄文時代後期末葉新地4式)は竪穴住居跡3棟、土坑1基がある。IV期(縄文時代晩期初頭大洞B1式)は竪穴住居跡1棟、配石遺構がある。V期(縄文時代晩期前葉大洞BC式)には竪穴住居跡1棟、土坑1基、VI期(縄文時代晩期中葉大洞C1式)配石遺構4基、土坑2基がある。

出土した土器は縄文時代中期末の大木10式土器と後期後葉の新地3式から晩期中葉大洞C2式までの土器が出土している。

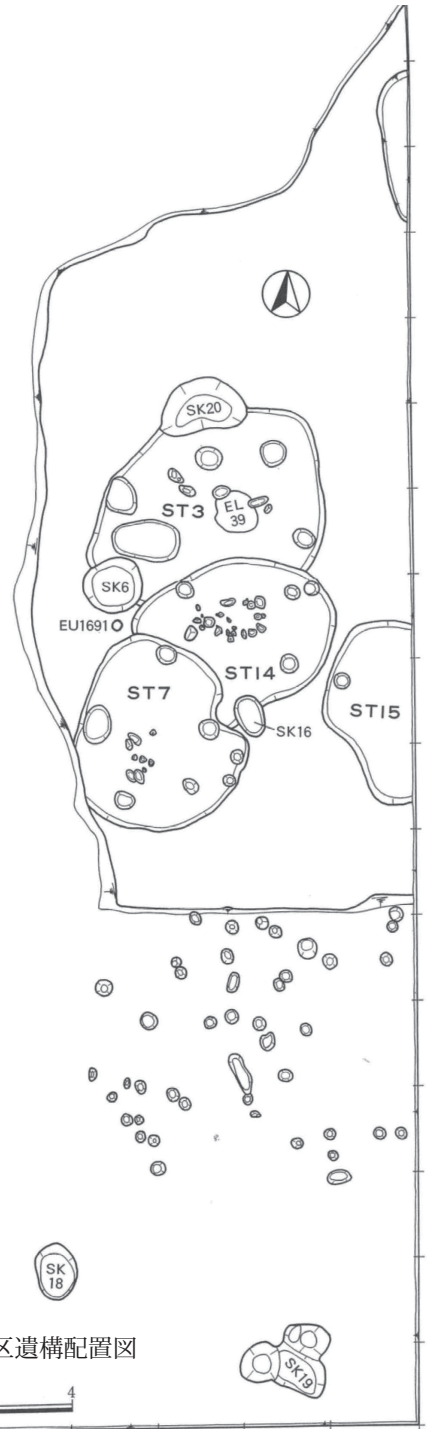




北区遺構配置図

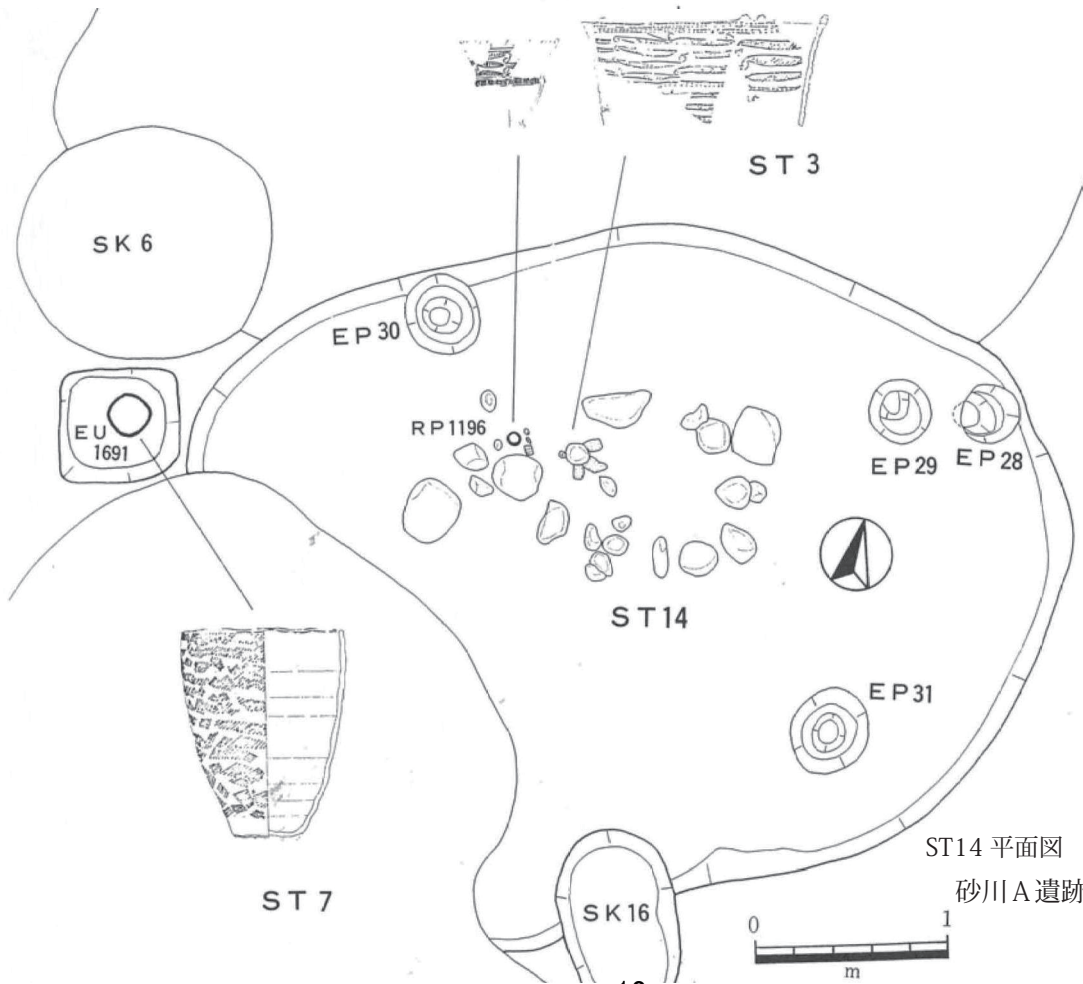
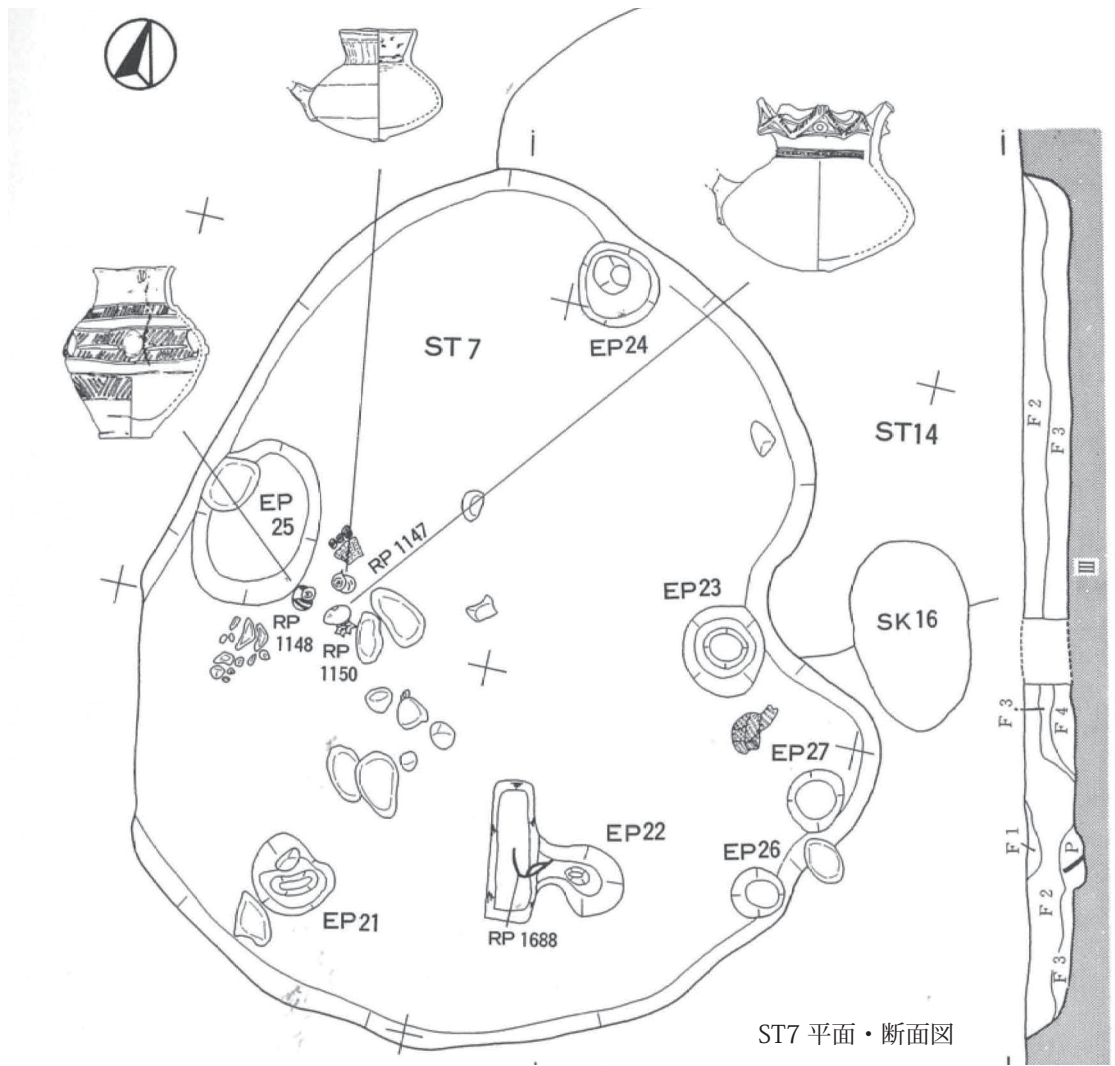


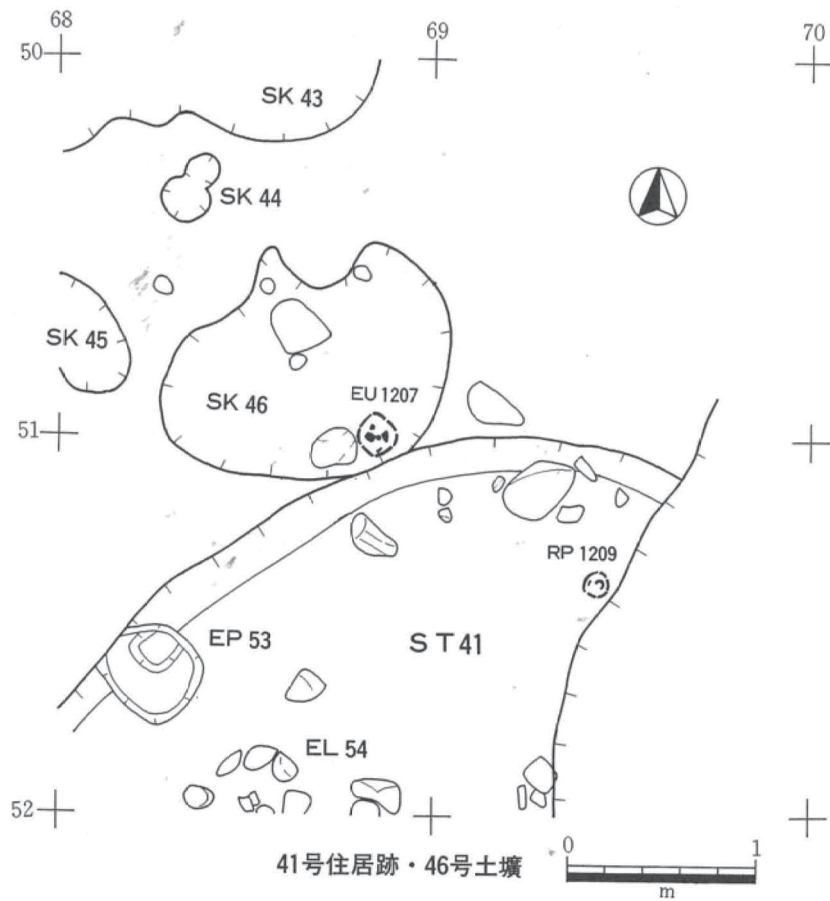
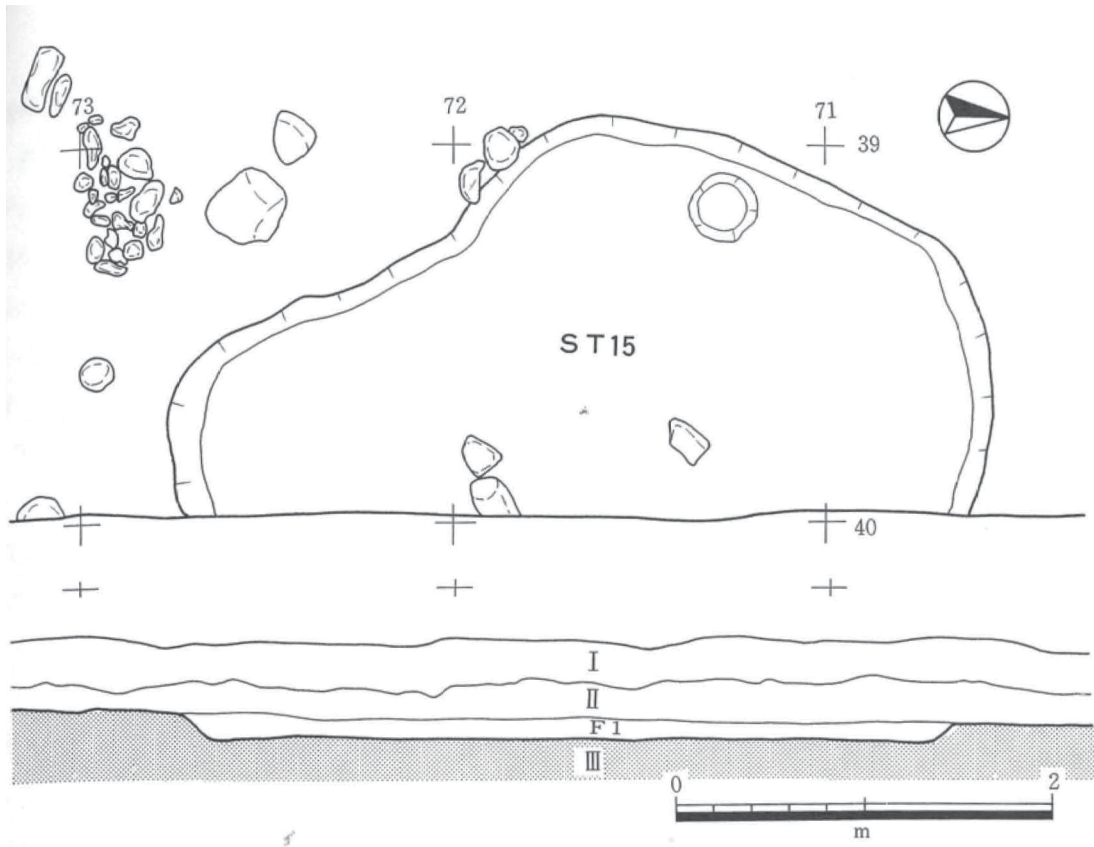
東区遺構配置図



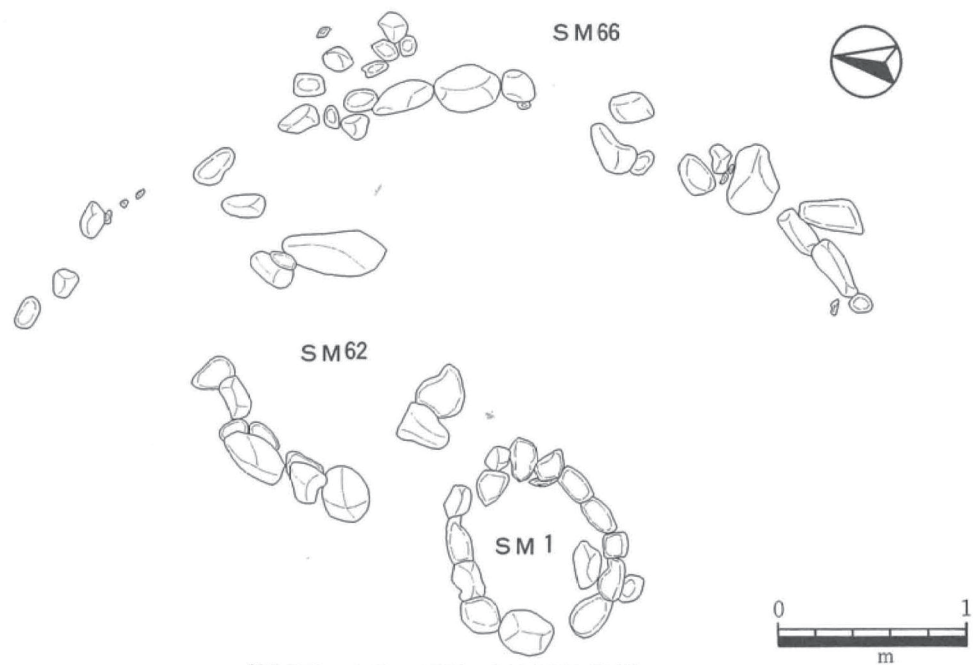
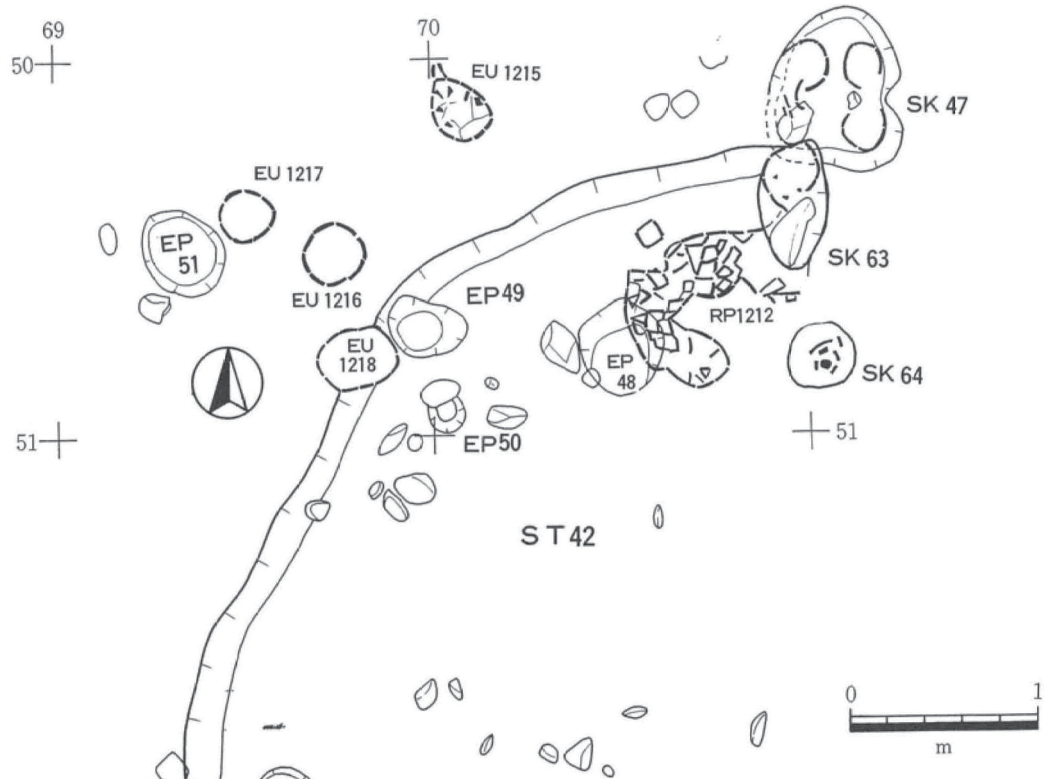
西区遺構配置図

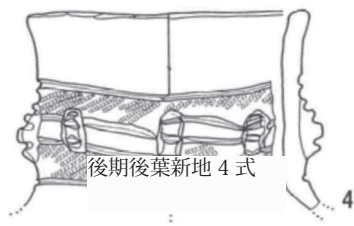
砂川A遺跡遺構配置図



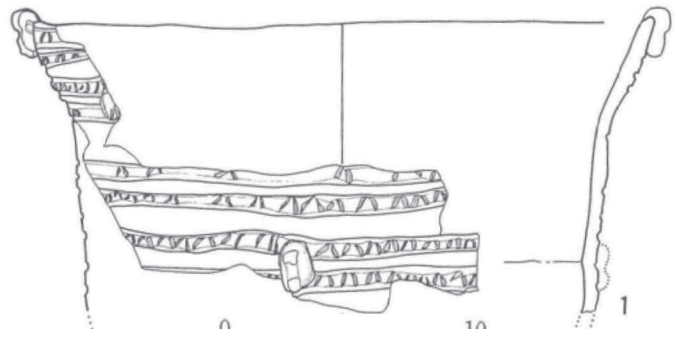


砂川A遺跡 15号・41号住居跡





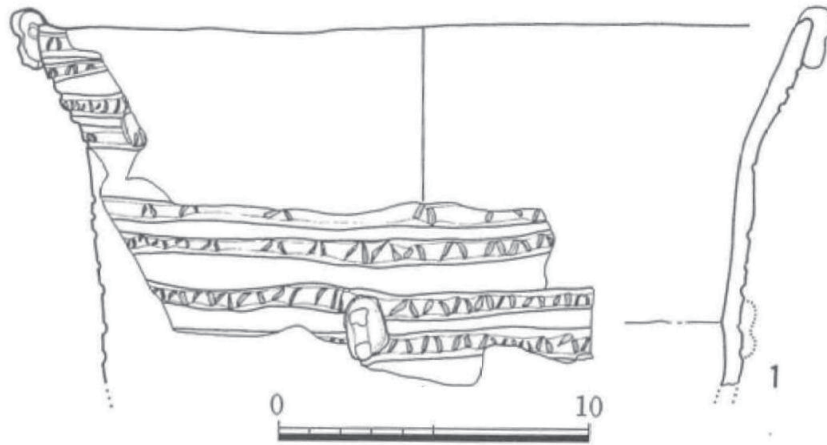
ST7 出土土器



後期後葉新地 2 式

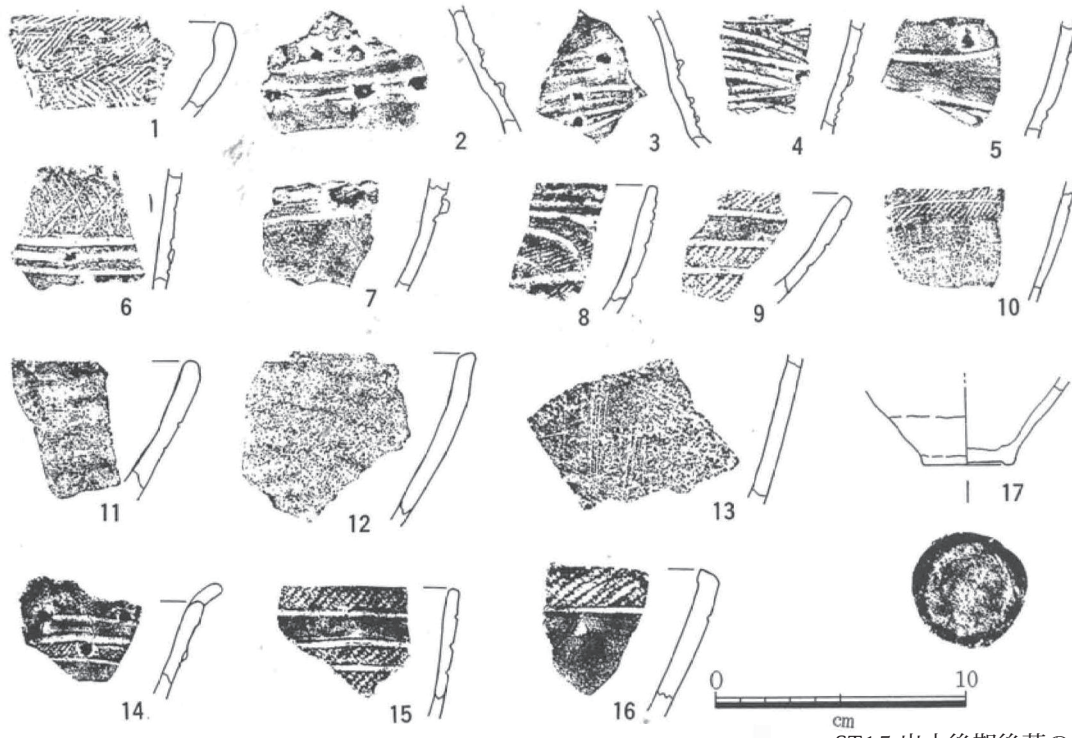


後期後葉新地 3 式

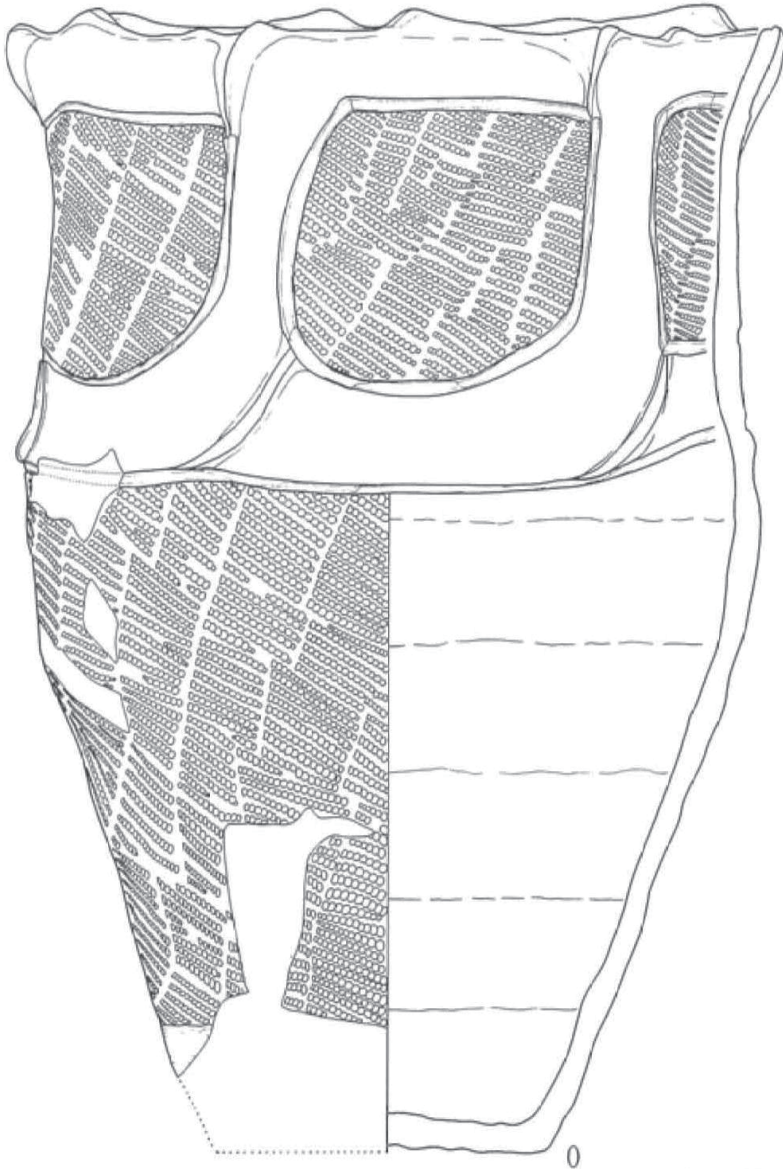


後期後葉新地 4 式

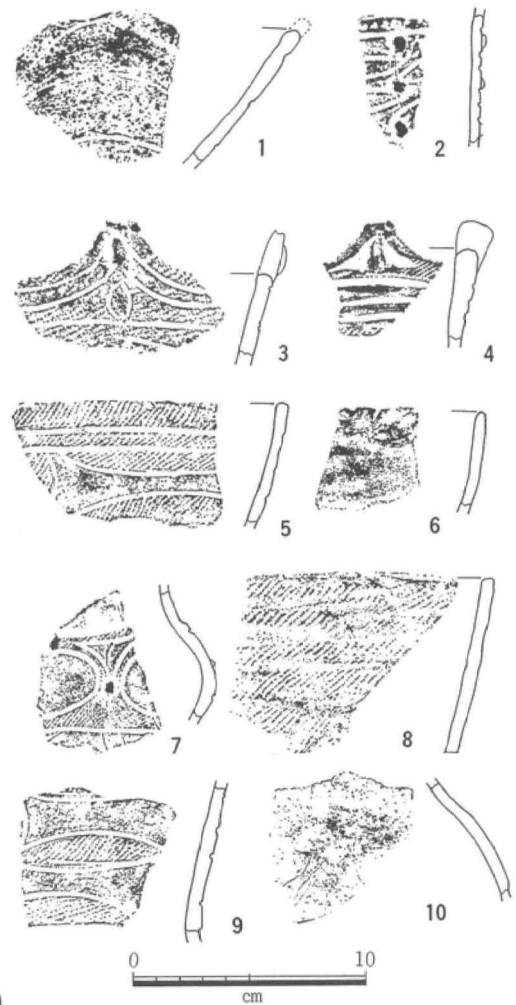
ST14 出土土器



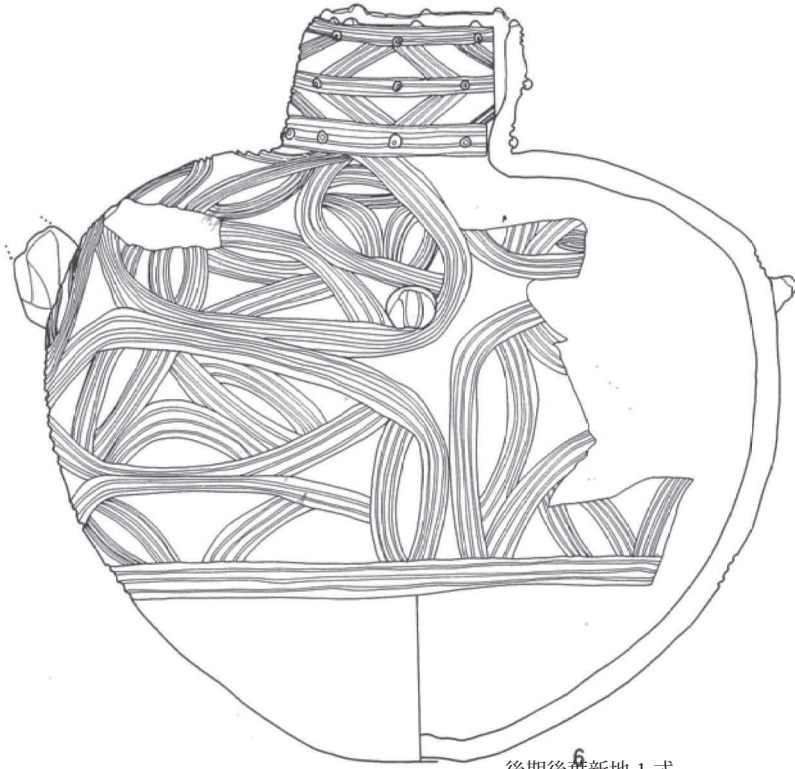
ST15 出土後期後葉の土器



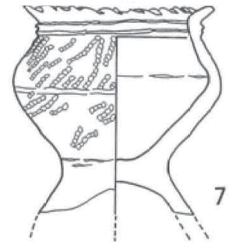
SK19 出土後期初頭の土器



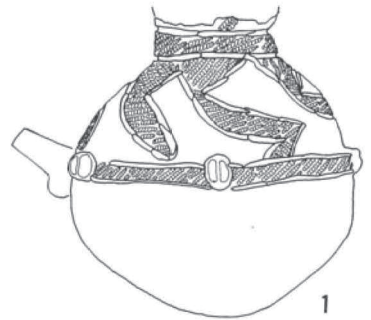
SK20 出土後期後葉の土器



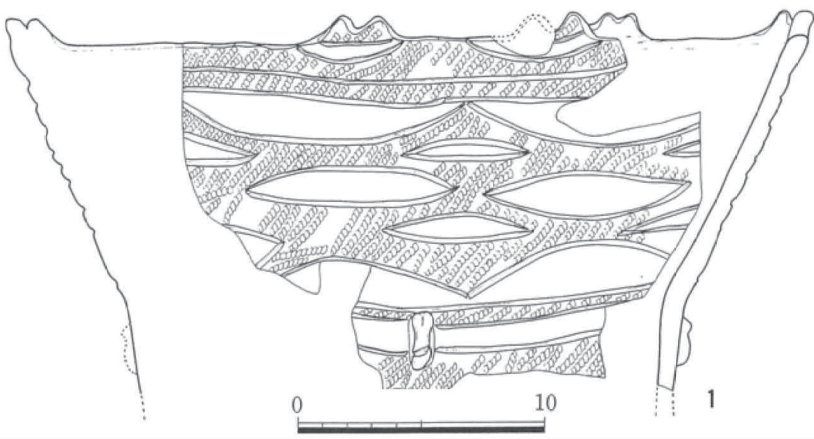
後期後葉新地 1 式



後期後葉新地 3 式



後期後葉新地 3 式

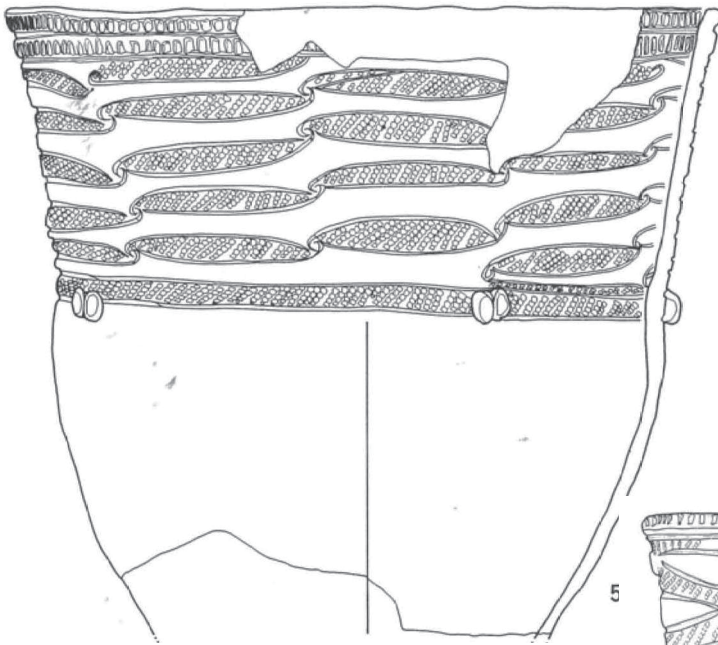


後期後葉新地 2 式

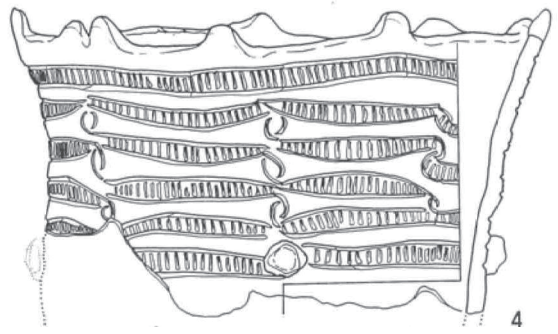


後期後葉新地 3 式

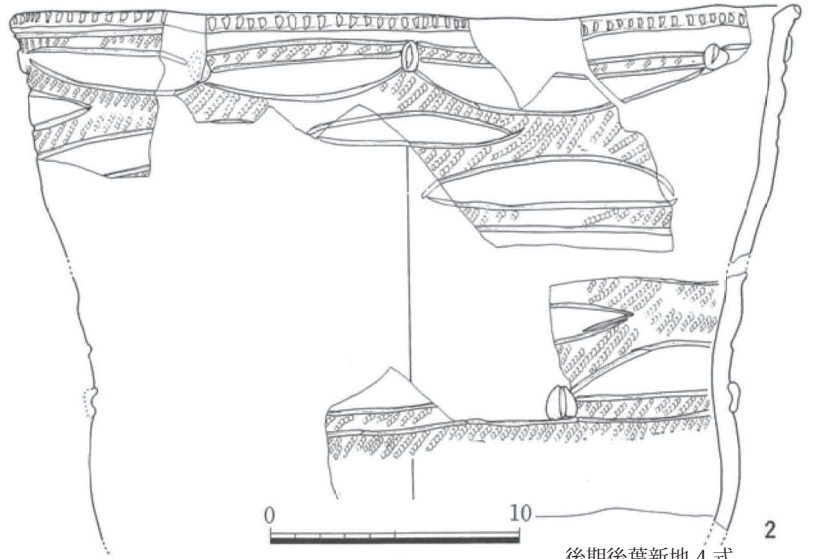
包含層出土の後期後葉の土器 (1)



後期後葉新地 3 式



後期後葉新地 4 式

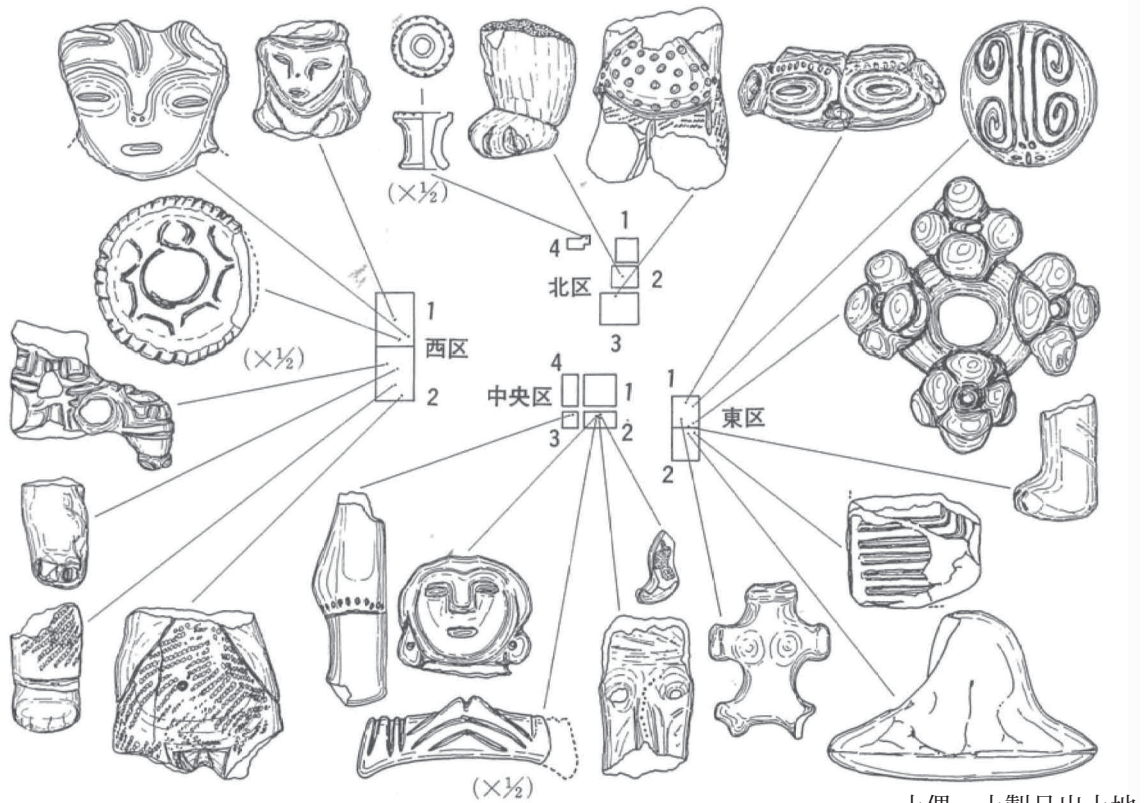


後期後葉新地 4 式

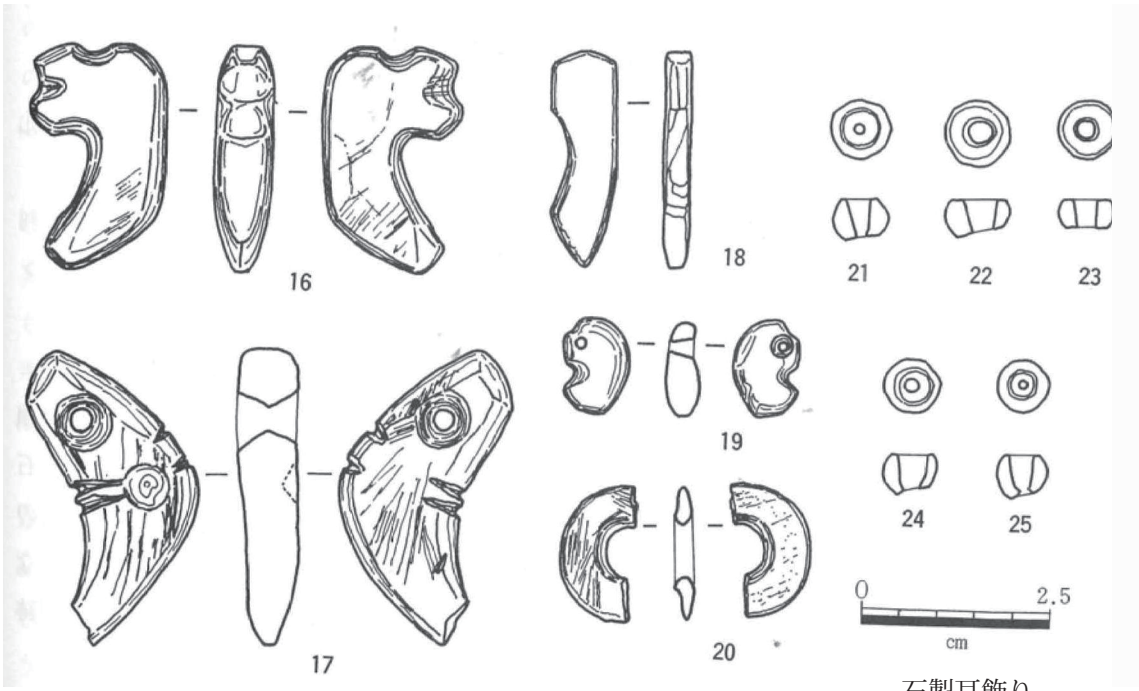


後期後葉新地 3 式

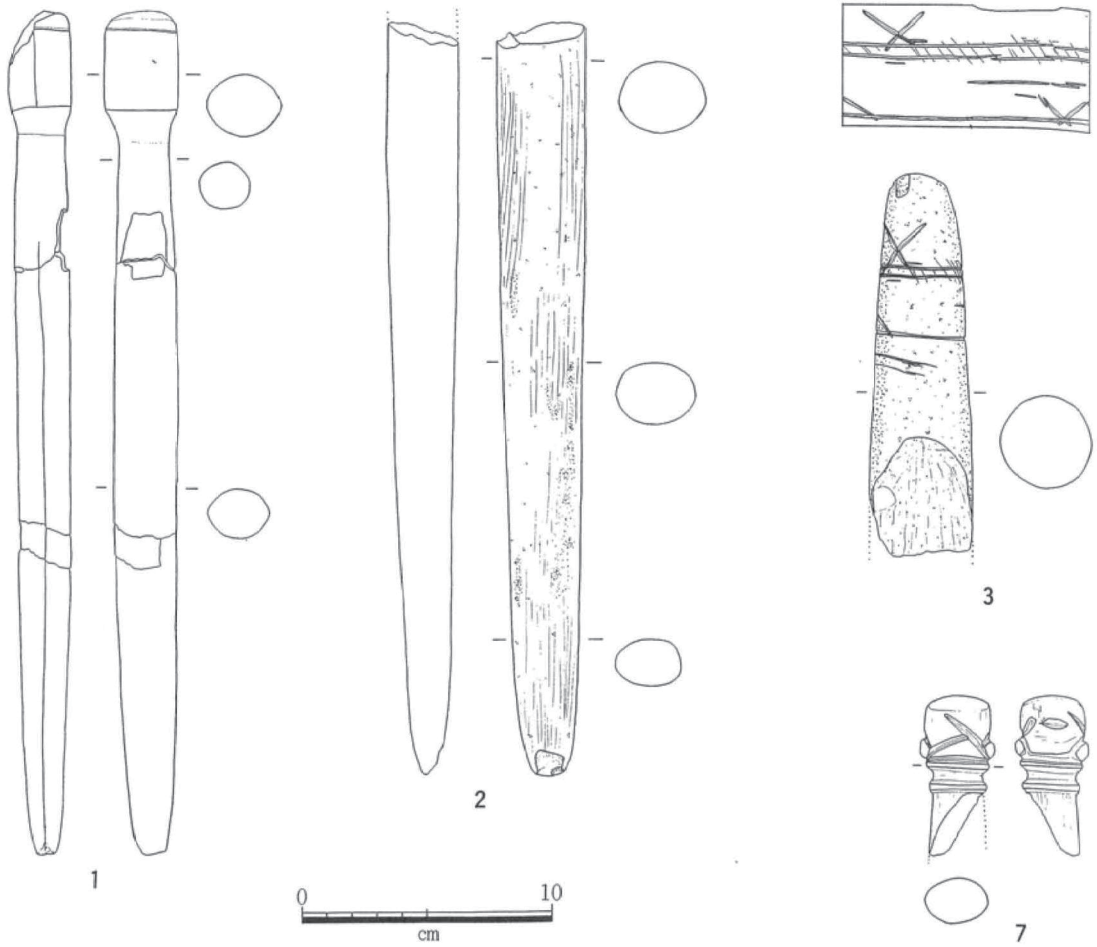
包含層出土の後期後葉の土器 (2)



土偶・土製品出土地



石製耳飾り

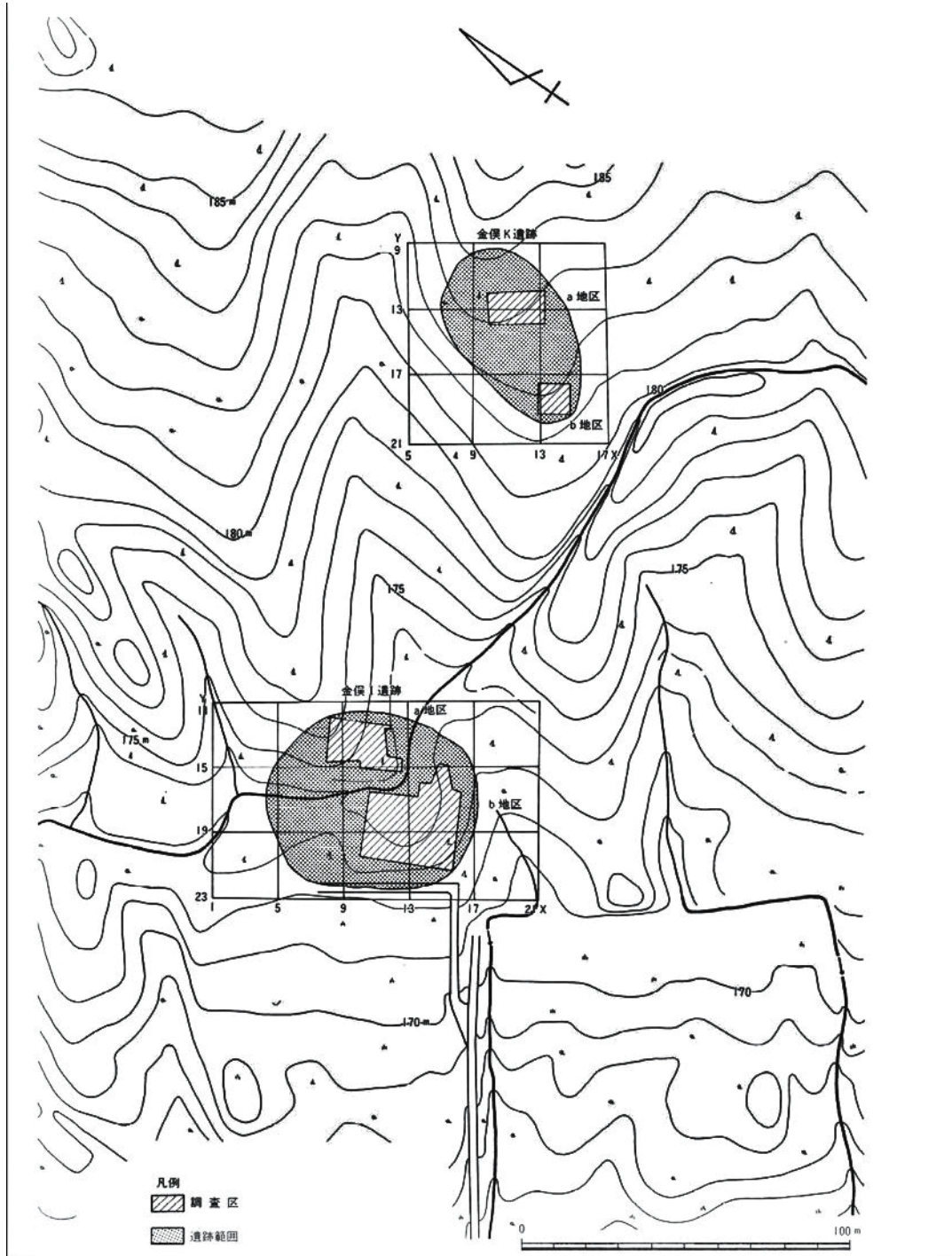


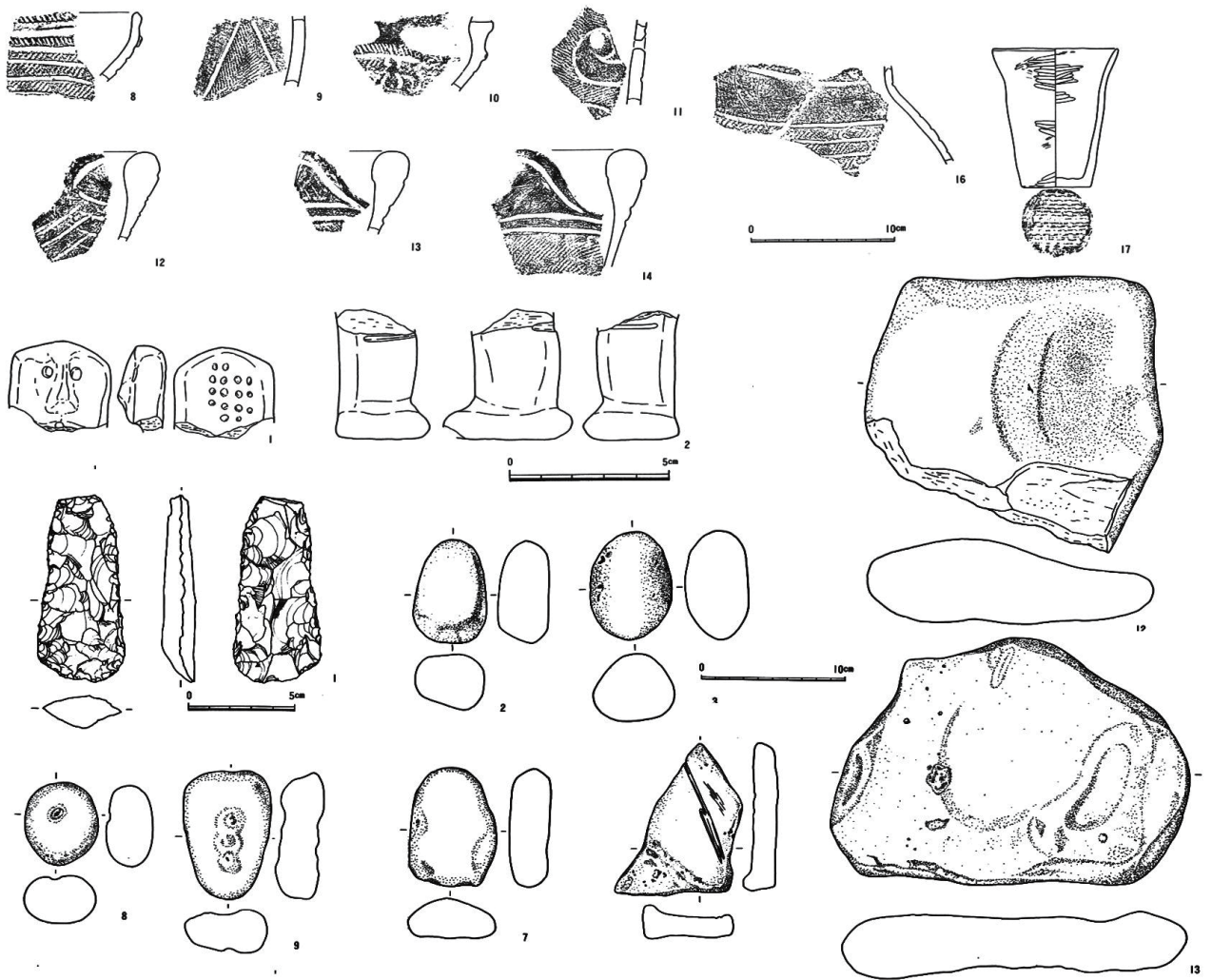
石棒・石剣

6 金俣 I、K 遺跡

遊佐町金俣地区にある。鳥海南麓農地開発事業に伴って 1992 年に緊急発掘調査が行われた。I 遺跡では住居跡は確認されなかったが炉跡が 1 基と土坑 2 基が検出された。後期中葉加曾利 B 1 式の土器が出土したが、ほとんどが破片で無文土器 1 個体が復元できたにすぎない。打製石器は石筥 1 点と剥片 12 点しかなく、礫石器が 17 点出土している。

山麓部に立地する植物質食料の出作りのなキャンブ地かもしれない。K 遺跡では遺構・遺物とも出土しなかった。



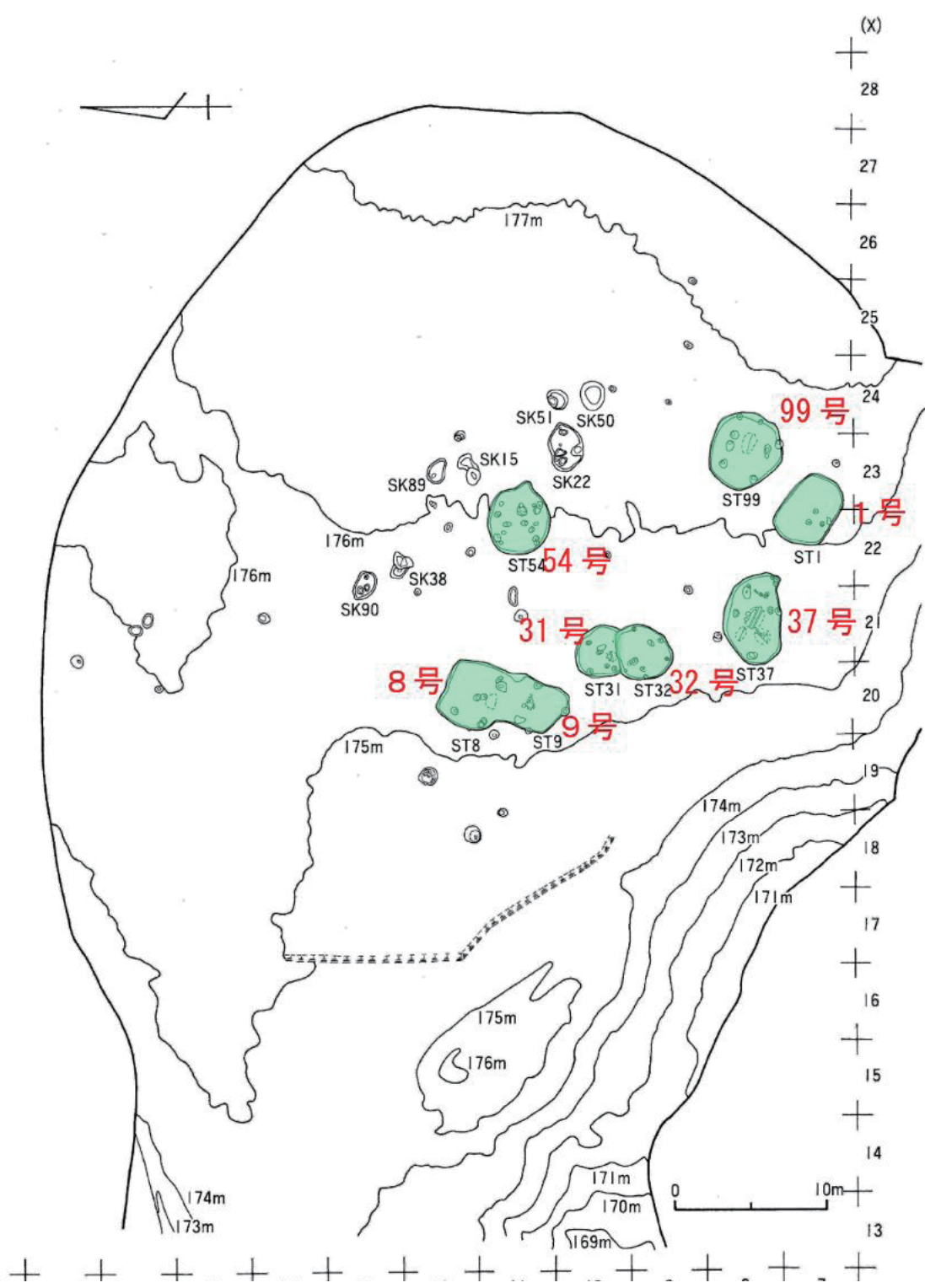


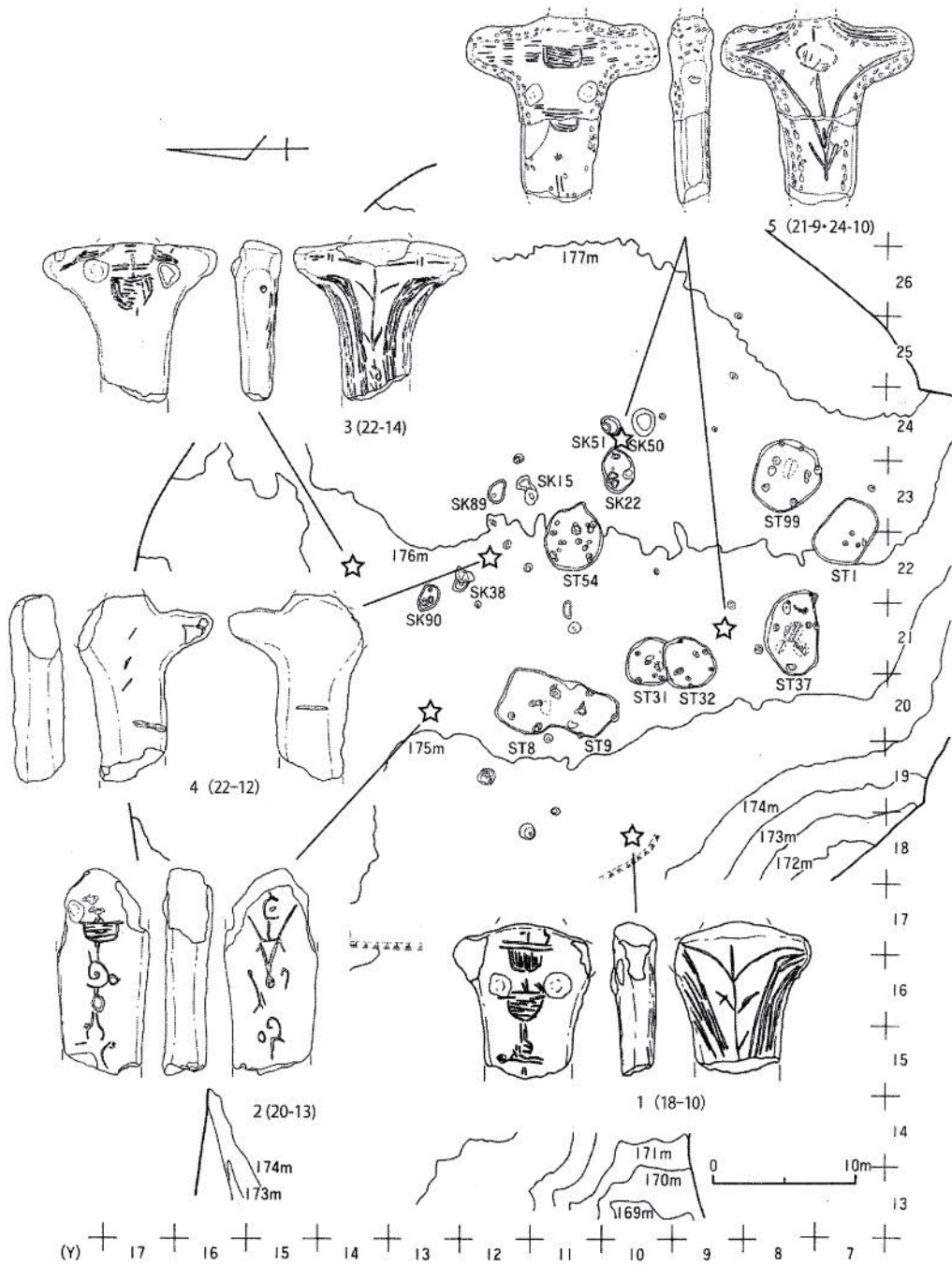
金俣 I 遺跡の出土遺物

7 蕨台遺跡

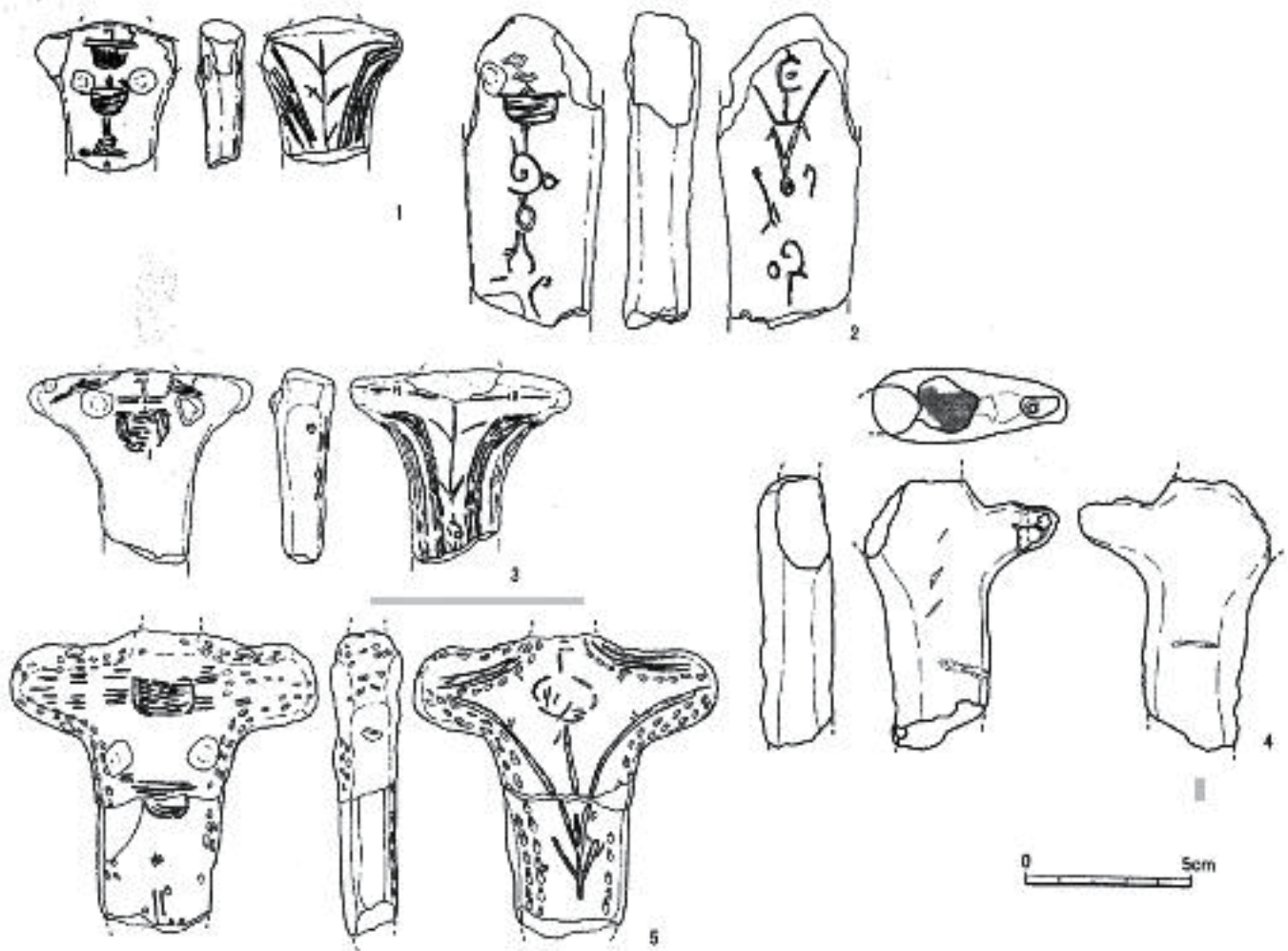
酒田市(旧八幡町)下青沢字蕨台に所在する。六助集落の南約 1 km に位置し、標高 177 m の丘陵上に立地する。当地は山林になる前の大正年間に学校の運動場として利用されていたという。国営農地開発事業に伴い小規模な試掘を伴う 1990 年の調査で縄文土器が出土し、遺跡として登録された。翌 1991 年に範囲確認の試掘調査を行った。37 ケ所の試掘坑を設定したところ、うち 2 ケ所で縄文時代の遺構と見られる土色変化が確認され、13 ケ所から縄文時代の遺物が出土した土器片は縄文時代後期初頭のものであることが判明した。遺跡範囲は東西 50 m、南北 130 m に及ぶと判断された。

この調査結果を基に東北農政局と協議し、1993 年に(財)山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。発掘調査ではいずれも後期初頭のもつと見られる 8 棟の竪穴住居跡と 7 基の土坑が検出された。住居跡はその重複関係から 2 時期があることが判明した。出土した土器は後期初頭に位置づけられる。土偶も出土した。





出土土偶の分布状況
(土偶縮尺不同)



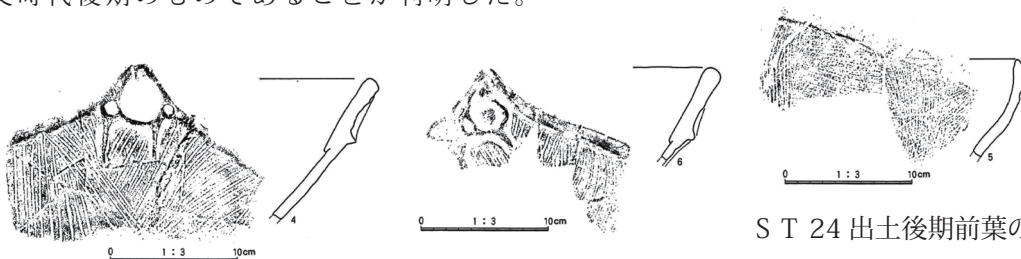
8 野新田遺跡

鶴岡市中野新田字村表に所在する。遺跡は赤川の右岸、河岸段丘の中位に立地する。河床との比高およそ6mを測り、標高はおよそ80mである。

遺跡は1970年代中頃に、ほ場整備事業が行われた。この事業によって複式炉が発見されたため、その一部が朝日村教育委員会によって調査された。東北横断自動車道酒田線の建設に先だって、計画路線内の試掘の結果、ほ場整備で破壊を免れた地区の存在が明らかとなり、この部分を対象として1994年に発掘調査が行われた。

調査では縄文時代中期の竪穴住居跡58棟、土坑139基などが検出され、縄文時代中期中葉大木8b式を中心とし404箱の土器・石器が出土した。

報告書(伊藤・黒坂1995)では中期に属するとされていたST24から出土した土器を検討した結果、縄文時代後期のものであることが判明した。



ST 24 出土後期前葉の土器

9 小山崎遺跡

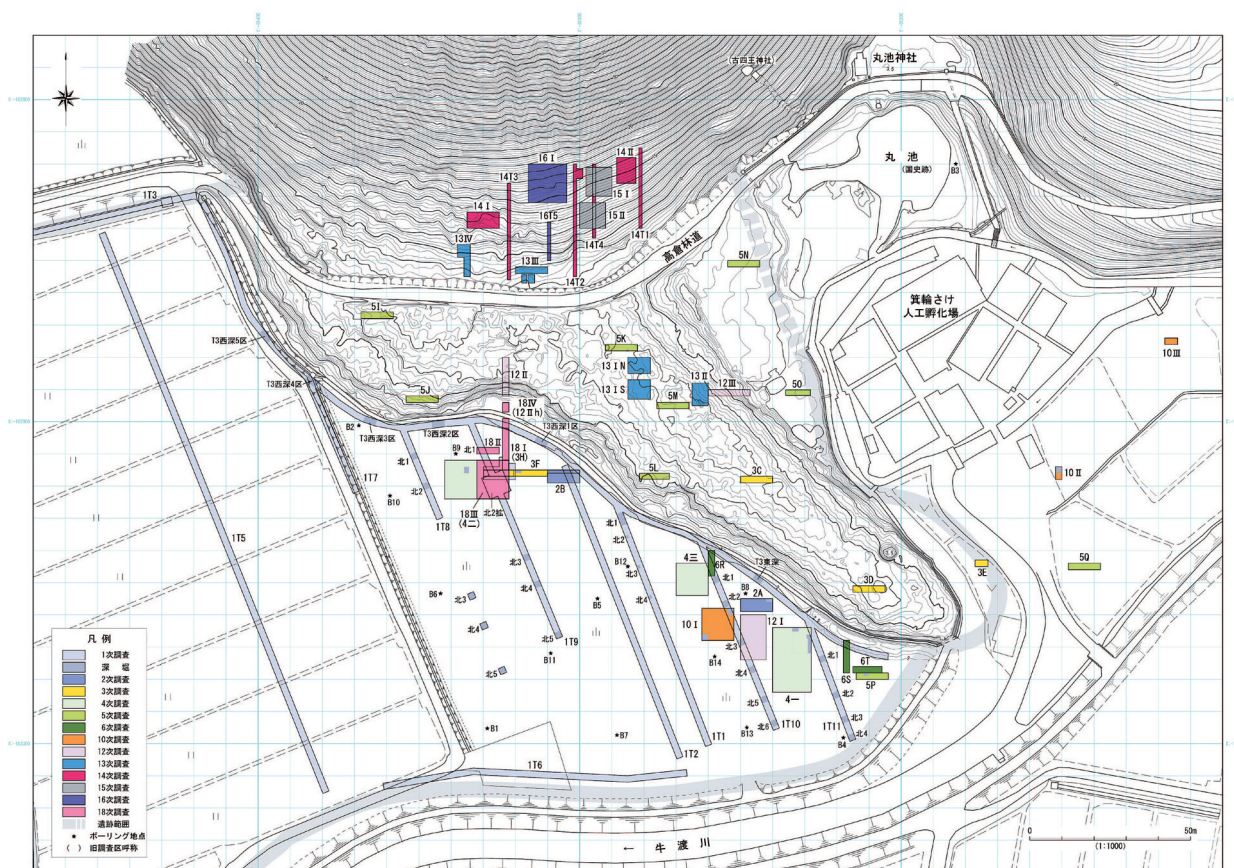
調査の経緯

1995年の県営圃場整備事業に伴う試掘調査でその重要性が明らかとなった。破壊を免れない用排水路についてのみ調査対象とした記録保存の調査であった1次調査が始まってすぐに、完形土器を含む大量の縄文時代後期の遺物が発見され、その下位でも県内ではほとんど出土することのない動植物遺存体が良好な状態で残ることも明らかとなった。そのため、県教育委員会は情報量が多い上に長期間にわたる県内で類をみない遺跡であるとして、文化庁の指導を仰いだ。その結果、記録保存調査から一転、現状のまま保存する方針に変更された。

安定的な乾田化のために山際からの湧水を遮断するほ場整備事業の計画と、その湧水に保全された動植物遺存体の保護は両立しないため、遺跡中枢部の土地は事業区域から外され、町によって買い上げられた。これ以降、小山崎遺跡は国指定を目指して、遺跡の価値を明らかにするために保存目的調査が進められることとなった。

発掘調査の経過

小山崎遺跡の発掘調査は1995年度、1998～2011年度まで18回にわたって行われた。これらの調査は調査主体や調査事業別で大きくⅣ期に分けられる。1995年から2002年までのⅠ期調査（1～7次）は山形県教育委員会の主体や委託で実施され、県教委の直営、県立博物館、財団法人山形県埋蔵文化財センターによって行われた。2003～4年までのⅡ期調査（8～11次）は遊佐町教育委員会が緊急雇用対策事業で実施した小山崎遺跡の周辺の調査、2005～9年までのⅢ期調査（12～16次）は文化庁の国庫補助を得て遊佐町教育委員会が実施した小山崎遺跡と隣接地の調査、2010・11年のⅣ期調査（17・18次）は同じく遊佐町教育委員会が国庫補助事業で実施したボーリング調査と報告書作成中に生じた疑問を解決するための補足調査として行われた。



小山崎遺跡調査区配置図

調査成果の概要

小山崎遺跡は、山形県飽海郡遊佐町吹浦字七曲堰東・七曲・柴燈林に所在する。遺跡は出羽富士鳥海山の山体周囲に広がった溶岩台地の西南西の裾、庄内平野北端との境界に位置し、山頂からの直線距離は14kmで、遺跡から山容全体を間近に仰ぎ見ることができる。遺跡は溶岩流からなる磯の南端、十六羅漢の南に開いた吹浦川河口の上流約1.5kmにある。

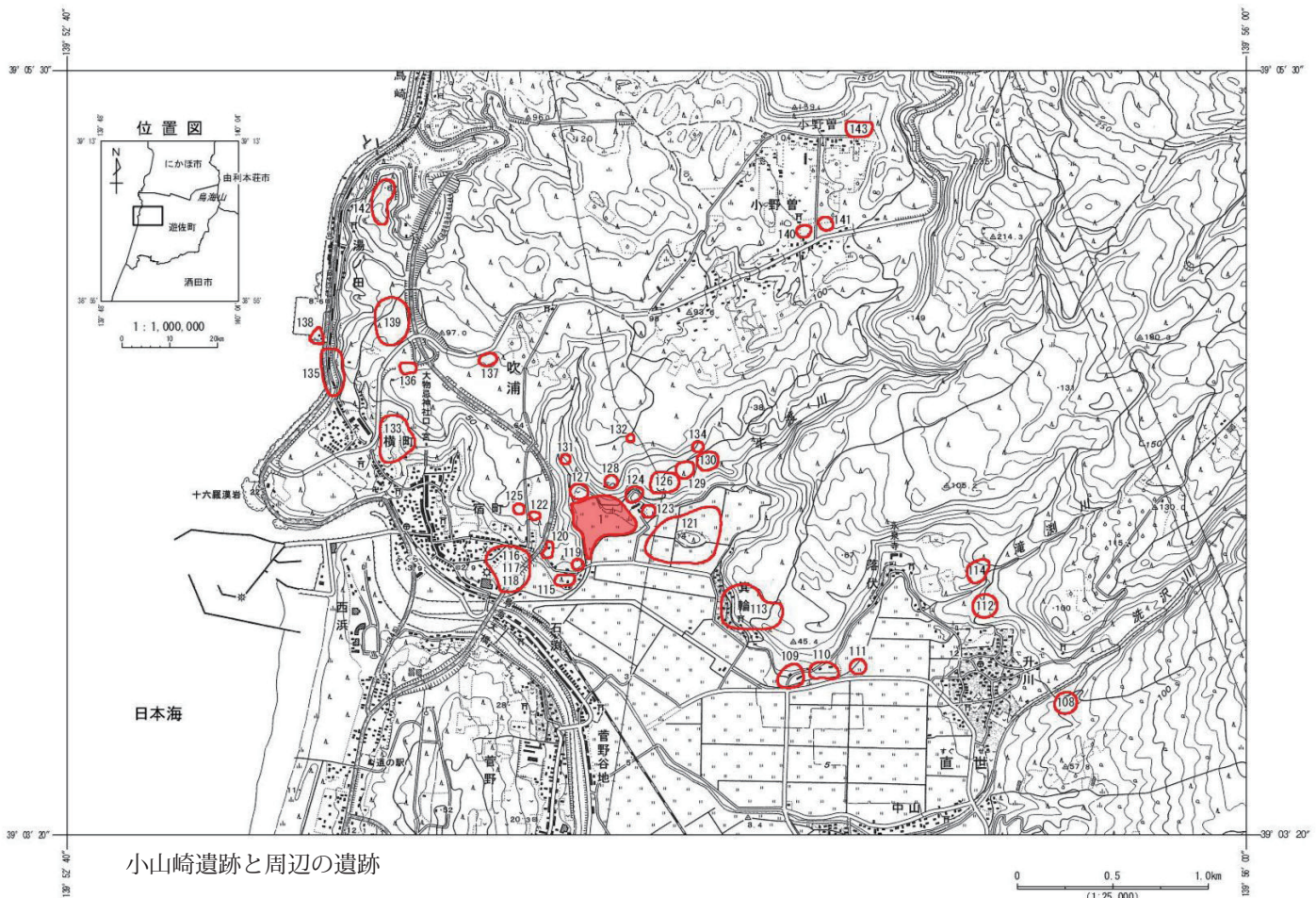
小山崎遺跡は縄文時代早期～晩期までの長期間営まれた遺跡である。主に低地東部では前期、斜面地では中期末～後期末、低地西部では中期末～晩期の遺構・遺物が検出された。

低地東部では前期中葉の貝層や前期初頭のドングリ集積が検出された。貝層はシジミ主体で、その下からはほとんど間層を挟まず人骨が分散して出土し、貝層上面で骨角器が確認された。また、ドングリ集積のコナラのほとんどは、発芽防止のため先端を潰す処置が施されていた。

平均斜度16度の斜面地では中期末から後期後葉にかけての竪穴住居跡（竪穴建物状遺構を含む）が23棟検出された。後期集落は中期末葉の集落に比べて標高が低く、水辺により近い西側へ展開する傾向がある。水辺環境のさらなる積極的な利用が始まることと関係するのだろう。

低地西部では水辺遺構と捨て場と考えられる多量の遺物を含む層が確認されている。水辺遺構は敷石と打込杭列、木敷による、低地に施された大規模な整備のための構築物であり、居住域と水辺をつなぐ道もあった。また、捨て場から土器や石器のほか骨角器・漆製品や大量の動植物遺存体が発見された。

珪藻化石の分析結果から、低地部は海進・海退の影響で早期は潟湖であったが、前期に干潟になり、中期末以降は湿地に変化したことがわかっている。長期の気候変動に伴う低地部の環境変化に合わせ、居住域の移動と、水辺環境の整備が行われたことが窺われる。



小山崎遺跡と周辺の遺跡

極めて長期間にわたる遺跡であるが、ここでは縄文時代後期を中心とする時期について、その調査成果を振り返る。

斜面部の居住遺構

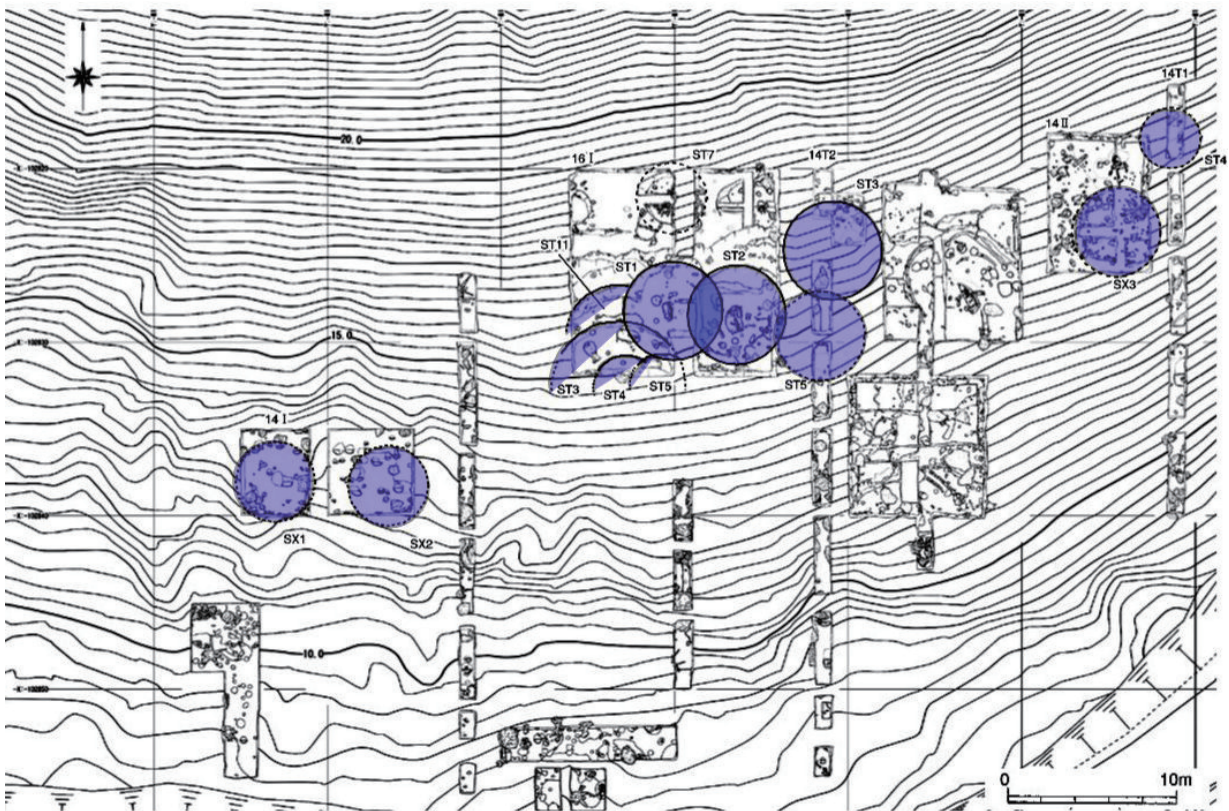
居住域調査の経緯

居住域を確認することが当初からの最大の課題であったが、それがどこにあるかは調査の中で常に重要視されていた課題だった。半島状に突き出た舌状台地上や低地を中心とする調査では発見に至らなかったが、13次調査の試掘坑で居住痕跡と判断される遺構覆土を確認して以来、16次調査までに、平均斜度16度の斜面地に中期末～後期後葉の複数の竪穴住居跡が確認された。

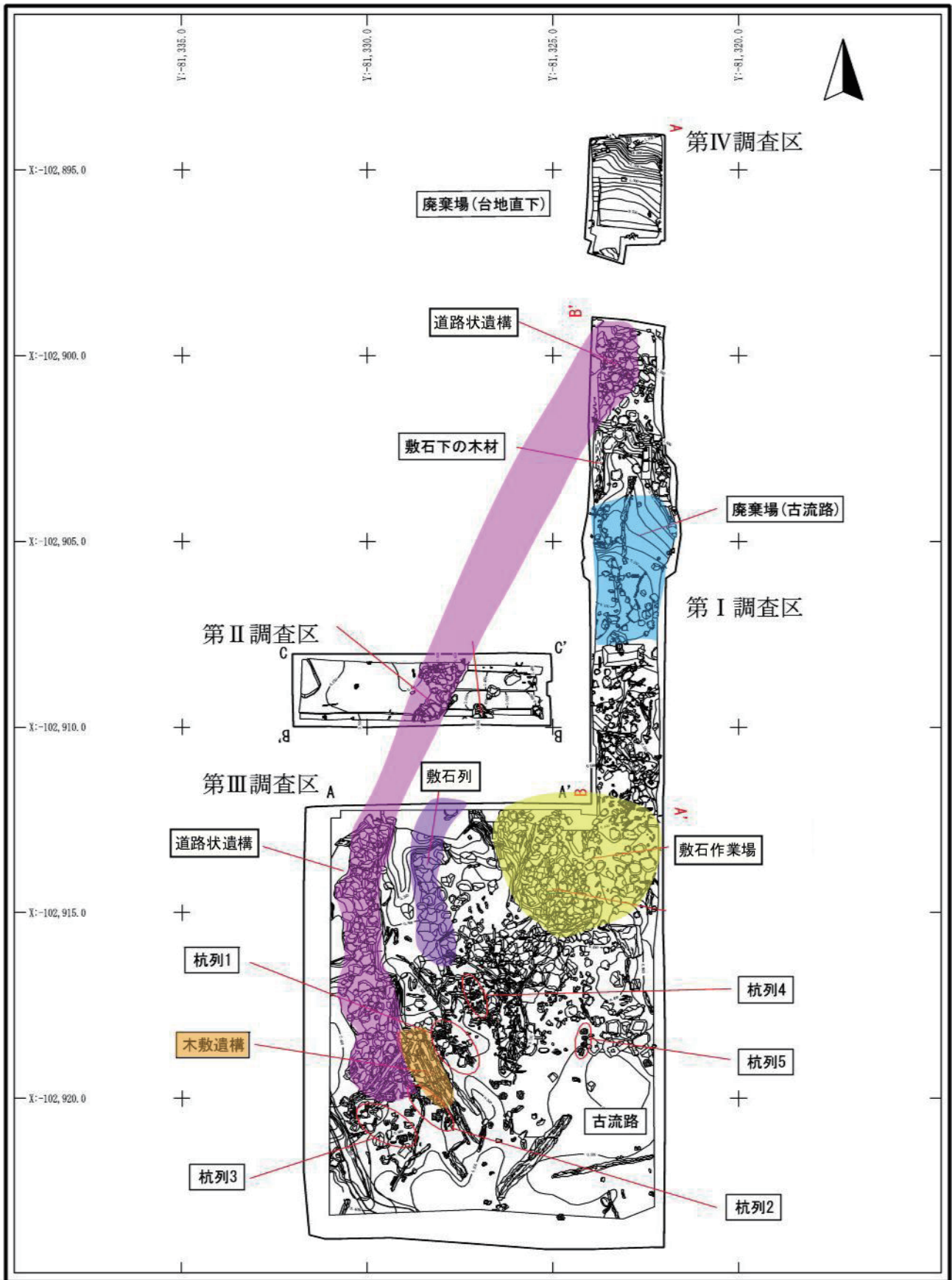
斜面居住域のまとめ

小山崎遺跡の斜面地では中期末～後期後葉竪穴建物跡（竪穴建物状遺構含む）が23棟確認されている。また、それ以前の分布調査（14次）で、柴燈林遺跡内の丸池北方斜面地で中期中葉（大木8a式期）の遺構が確認されている。

したがって、中期中葉から中期後葉（大木10式期）にかけて、柴燈林遺跡から小山崎遺跡の斜面地へと、居住域が西側に移動したことになる。その後、この地点では後期後葉まで居住が継続するため、低地の水辺遺構と対応した居住域と認定できる。また、中期末と後期の遺構群の位置を比較すると、後期の遺構群がやや標高を落とし西方に進出する傾向がある。



斜面部で検出した縄文時代後期前葉から末葉の住居跡



水辺の遺構平面図



低地西部の遺構（水辺遺構）

遺構の構造

水辺遺構は敷石と打込杭列、木敷による縄文時代後期から晩期の大規模な構築物である。今まで知られた沢水や湧水を部分的に活用したいわゆる「水場遺構」各種類型に単純には当てはまらない。長期にわたる居住が環境変化に応じさまざまな積極的水域利用をはかった、その総体を示す呼称として水辺遺構と呼んだ。

遺構は1次調査中に低地西部で検出されて以降、3・4・18次調査と、遺構の範囲と性格の解明に向けて計4度にわたって調査された。遺構は主に道路状遺構と敷石作業場、木敷遺構、木杭列の4つからなる。

①道路状遺構

道路状遺構は、「地業の可能性のある木材」と「敷石」、「舗装状粘土」で構成され、水辺と居住域を結ぶ「道」の機能を持つと想定される。水辺遺構中枢部から北東方向の居住域へ現状約23mの長さで検出され、幅は南端部で約2m、中央部では約60m～1mを測る。

道路状遺構は、まず湿地に木材を配置し、沈み込みを防ぎ、その上に川原石を並べ、石の上を粘土で覆って舗装している。

②敷石作業場

敷石作業場は敷石が南北6m、東西4m程の広がりを持つ「敷石作業場」である。作業場の敷石は偏平な安山岩が面を揃えて配置されており、水磨された滑らかな表面を持つ石が多い。遺構に用いた石材と同様の安山岩は、遺跡の傍らを流れる牛渡川の上流400mほどの現河床に豊富に存在する。周辺で容易に入手できる石材を用いて、構築していたことが推測される。

③木敷遺構

南西部で発見された4本並んだ丸太材であり、流水部における足場材と考えられる。杭列1と2の間にあり、長さ290cm、幅約60～70cmの規模（残存値）で南東方向に伸びるが、先端は欠損、流出しており、本来の長さは不明である。平均直径8.3cmの比較的太さが揃い、直線的なで曲っていない丸太材が選択されている。材の間にはそれらを固定するように、細杭が打込まれる。

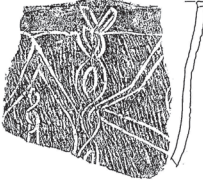

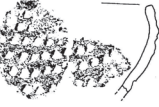
水辺遺構の機能と年代

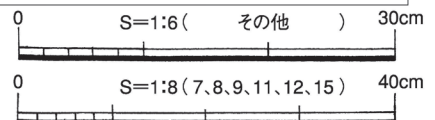
遺構は後期初頭～前葉主体のVI・VII層段階に台地寄りでも敷石や地業木材により造られ始め、後期中葉のV層堆積時に、敷石作業場や道路状遺構に加え、打ち込み杭等の整備が完了する。この時期が最も盛んに利用された時期である。微高地に形成された敷石作業場の西方には、付帯する道路状遺構が2列存在するが、構築時期には差がある。敷石列1は後期中葉には完成し、後期末葉・晩期前葉段階のIV層（粘土）の乾燥化した堆積環境に至り、衰退、埋没を迎える時間的流れが読み取れる。一方、敷石列3は一部敷石上に貼り粘土状の盛土があり、後期中葉に至るまで遺構は保たれるが、同時期に湿潤な環境が消えると衰退、終焉を迎えた。

出土品の概要

縄文土器

縄文土器は早期槻木1式土器を最古として、後半の田戸上層式、茅山下層式、素山上層式等早期から晩期前葉まで前期後半の大木4式土器を除いてすべての土器型式がある。後期の土器は、低地部と斜面居住域の遺跡のほぼ全ての場所で出土した。この内、低地から出土した後期の土器を年代順に並べて図示した。

時期区分	土器型式 (併行関係)	土器 分類	出土地の性格と主要な土器				
後期 初頭	宮戸 I b 式 併行期	16 群	水辺遺構初期石敷構築面 ※最新土器形式ではない	水辺遺構下の自然堆積層	水辺遺構西側隣接地(自然堆積層)		
			 1 [18. I 2. VI]	 2 [18. III T. VII]	 3 [二135-94. VII]	 4 [二129-94. VII]	 5 [二129-94. VII]
			廃棄場(浅い沢の台地寄りに形成)				
			 6 [18. IV. VII]	 7 [18. IV. V]	 8 [12. II h. V]	 11 [12. II h. V]	 9 [12. II h. V] + [18. IV. IVa2]
 10 [18. IV. V]	 12 [12. II h. V]	 13 [18. IV. V]	 14 [18. IV. IVa2]	 15 [18. IV. IVa2]			
 16 [T3西深1. X]	 17 [T1.北端. V]	 18 [T1.北端. V]	 19 [T1.北端. V]	 20 [T3東深. IVa]			
 21 [T3東深. IVa]	 22 [T3東深. IVa]	 23 [B149-92. VIb]	 24 [B149-91~93. VIc]	 25 [T9北4. Xb]			
 26 [T9北3. X]	 27 [T8北4. IVb]	廃棄場(浅い沢:台地から約10~15mに形成)		遺構外包含層(台地から50m以上離れた沖側)			



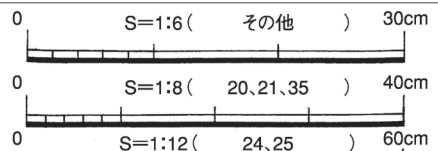
()で示す地点と層位は、当該土器型式が最新(最終層形成期)となる層位と調査区を示す。
[]で示す地点と層位は、当該土器型式以降の資料も含むが該期の主要な土器の包含層を示す。

低地部の後期初頭の土器

時期区分	土器型式 (併行関係)	土器 分類	出土地の性格と主要な土器
後期 前葉	・堀之内1式 ・網取Ⅱ式 併行期	17群	<p>水辺遺構(最新土器形式ではない)</p> <p>1[18.Ⅱb.Vf] 2[18.Ⅱb.Vb] 3[18.Ⅱc.Va2] 4[18.Ⅱc.Va2] 5[18.Ⅰ2.V] 6[T9北2西搨.V] 7[T9北2西搨.V]</p>
			<p>杭材No.13.16.17断割(自然堆積層)</p> <p>8(T9北2.VⅦ) 9[18.ⅢSB-4T.VⅦ] 10(T9北2.VⅦ)</p>
			<p>水辺遺構下の自然堆積層</p> <p>11[T9東搨.VⅦ] 12[T9東搨.VⅦ] 13[T9北2西搨.VⅦ] 14[二135-94.VⅦ] 15[二135-94.VⅦ] 16[18.Ⅲ1Tc.VⅦ]</p>
			<p>水辺遺構西側隣接低地(包含層)</p> <p>17[二129-94.VⅦ] 18[二130-94.VⅦ] 19[二133-89.VⅦ] 20[二129-94.VⅦ] 21[二133-94.VⅦ] 22[18.Ⅱa.Va] 23[18.Ⅱa.Va]</p>
			<p>廃棄場(浅い沢の台地寄りを利用、一部沢中央へ流れ込み)</p> <p>24(12.Ⅱb.V-Ⅳ) 25(12.Ⅱh.V-Ⅳ) 26[18.Ⅰ3.VⅦ] 27(18.Ⅳ.Ⅳ) 28[18.Ⅰ4.VⅦ] 29(T3西深1.X) 30(T3西深1.X) 31(T3西深1.X) 32(B148-91.VⅦc) 33(T1北端.VⅦd) 34(T1北端.VⅦd) 35[R2.Ⅱ・Ⅰ+R3.Ⅱ] 36[R3.Ⅱ] 37(T3東深.Ⅳa) 38(T3東深.Ⅳa) 39[三167-76.VⅦ]</p>
			<p>包含層(低湿地東部)</p> <p>39[三167-76.VⅦ]</p>
			<p>包含層(低湿地東部)</p> <p>39[三167-76.VⅦ]</p>

()で示す地点と層位は、当該土器型式が最新(最終層形成期)となる層位と調査区を示す。
 []で示す地点と層位は、当該土器型式以降の資料も含むが該期の主要な土器の包含層を示す。

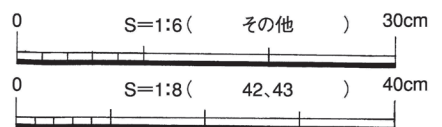
低地部の後期前葉前半の土器

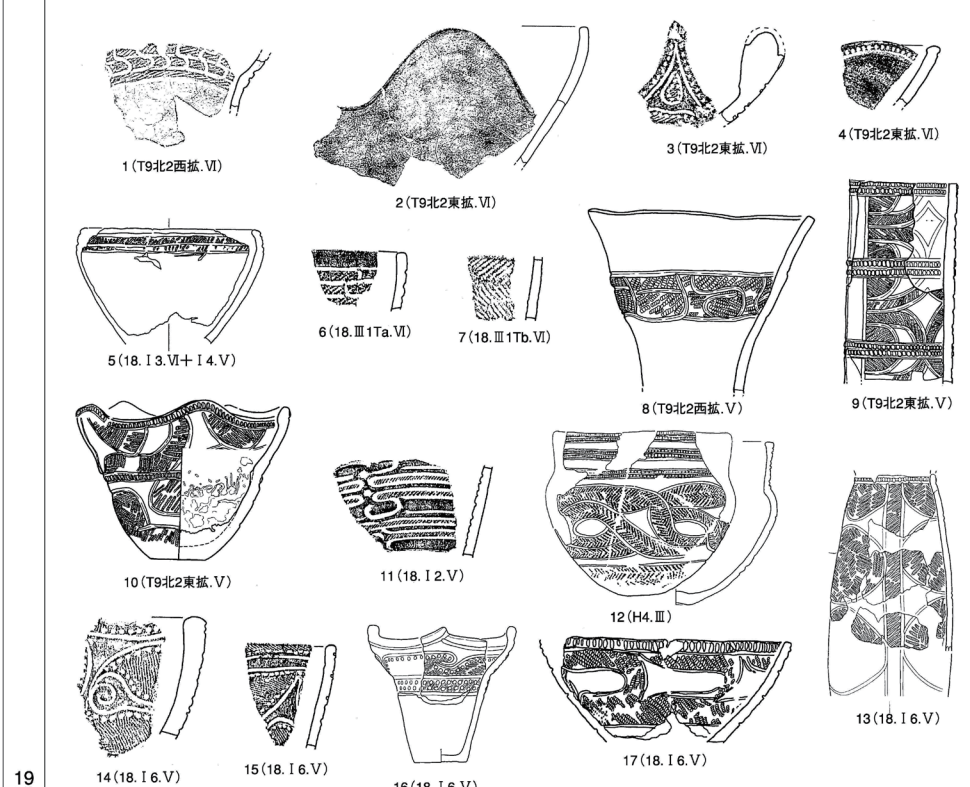


時期区分	土器型式 (併行関係)	土器 分類	出土地の性格と主要な土器
後期	前葉	・堀之内2式 ・十腰内I式 併行期 18群	水辺遺構(打込杭の敷設開始期)
			<p>1 (T9北2. VI) 2 [T9北2東拡. VI] 3 [T9北2西拡. V] 4 [T9北2. V] 5 (二136-93. VII)</p> <p>6 (二135-94. VII) 7 (18. I 5. V) 8 [18. II c. Va2] 9 [18. II a. Va2] 10 [18. II a. V] 11 [18. II a. Va3]</p>
			水辺遺構西側隣接地
			<p>12 (二131-93. VII) 13 (二131-93. VII) 14 [二131-92. VI] 15 [二131-92. VI] 16 (二129-91. V下)</p> <p>17 (二130-93. V下) 18 [二129-91. V中] 19 [二132-94. V] 20 [二130-93. V] 21 [二129-91. V下]</p>
			廃棄場(台地に沿う浅い沢:18次IV区を除く台地から10~15mに形成)
<p>22 (18. I 4. VII) RP111 23 (T3西深1. IX) 24 (T3西深1. IX) 25 (T3西深1. IX) 26 (T3西深1. VII)</p> <p>27 (T3西深1. VII) 28 (T3西深1. VII) 29 (T3西深1. VII) 30 (T3西深1. VI) 31 (T3西深1. VI)</p> <p>32 (T3西深1. VI) 33 (T3西深1. VI) 34 (B149-91. VII) 35 [B148-93. VIa] 36 [B148-93. VIa]</p> <p>37 (T1北端. VI) 38 [R4. II] 39 [R3. II] 40 [T3東深. III] 41 [T3東深. III]</p>			
			包含層(台地から40m以上離れた沖側)
			<p>42 [A. IV] 43 [-185-67. IV]</p> <p>44 (T9北3. VIIb~VIIb) 45 (T9北3. X) 46 (T9北4. VIc)</p>

()で示す地点と層位は、当該土器型式が最新(最終層形成期)となる層位と調査区を示す。
 []で示す地点と層位は、当該土器型式以降の資料も含むが該期の主要な土器の包含層を示す。

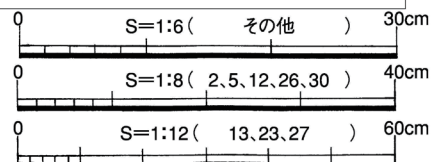
低地部の後期前葉後半の土器



時期区分	土器型式 (併行関係)	土器 分類	出土地の性格と主要な土器
後期	中葉	・加曾利 B1~B3式 ・宝ヶ峯式 併行期 19群 ~ 21群	水辺遺構(移働最盛期:石敷・打込杭・敷石道路の完成)
			
			廃棄場(①台地に沿う浅い沢を利用:南北10~15m、東西約80m ②小山崎丘陵東部低湿地)
			

()で示す地点と層位は、当該土器型式が最新(最終層形成期)となる層位と調査区を示す。
 []で示す地点と層位は、当該土器型式以降の資料も含むが該期の主要な土器の包含層を示す。

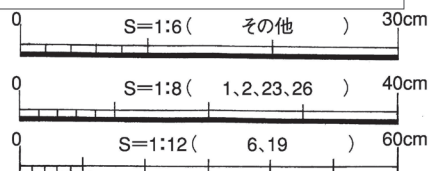
低地部の後期中葉の土器



時期区分	土器型式	土器分類	出土地の性格と主要な土器
後期 後葉	新地式 第Ⅰ～Ⅳ段階 ・西ノ浜式 ・金鋼寺2b式	22群	水辺遺構(衰退期:打込杭・石敷作業場の埋没開始)
			水辺遺構西側隣接低湿地(自然堆積層) ※接合しない流れ込の様相をます。
			廃棄場(舌状丘陵に沿い3ヶ所に形成。最大で東西約30m、南北10～15m)
			遺構外
			小山崎丘陵東部低湿地

()で示す地点と層位は、当該土器型式が最新(最終層形成期)となる層位と調査区を示す。
 []で示す地点と層位は、当該土器型式以降の資料も含むが該期の主要な土器の包含層を示す。

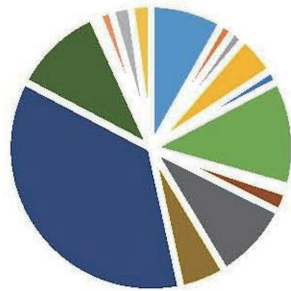
低地部の後期後葉の土器



石 器

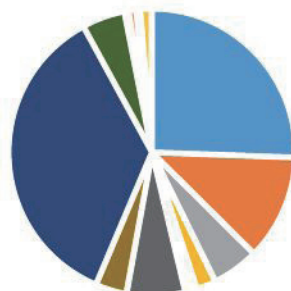
低地部分から出土した後期の石器には打製石器として石鏃、石錐、石匙、篋状石器、搔器、削器、楔形石器、切断調整石器加工痕ある剥片があり、磨製石器には石斧が、礫石器として磨石、凹石、砥石、石錘、石皿、敲がある。水辺の水辺のV層、捨場の石器組成を見ると両者とも植物質食料の加工に用いられていたと考えられる磨石が35%以上で最も多く、水辺V層では礫石器が過半数を占めている。捨て場では打製石器が過半数となっている。

水辺V層の石器組成



- | | | | |
|--------|--------|--------|----------|
| ■ 石鏃 | ■ 石錐 | ■ 石匙 | ■ 篋状石器 |
| ■ 搔器 | ■ 削器 | ■ 楔形石器 | ■ 切断調整石器 |
| ■ 加工剥片 | ■ 磨製石斧 | ■ 磨石 | ■ 凹石 |
| ■ 砥石 | ■ 石錘 | ■ 石皿 | ■ 敲石 |

廃棄場の石器組成

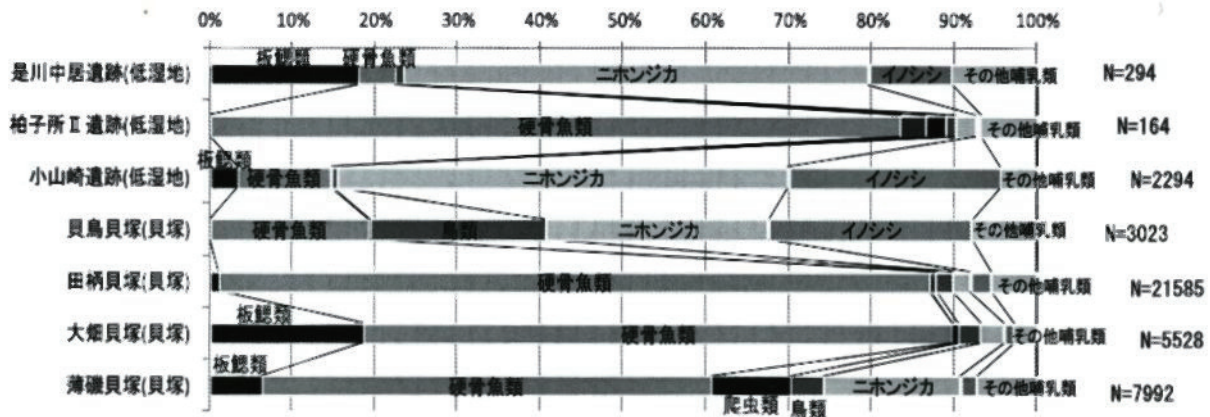


- | | | | |
|--------|--------|--------|----------|
| ■ 石鏃 | ■ 石錐 | ■ 石匙 | ■ 篋状石器 |
| ■ 搔器 | ■ 削器 | ■ 楔形石器 | ■ 切断調整石器 |
| ■ 加工剥片 | ■ 磨製石斧 | ■ 磨石 | ■ 凹石 |
| ■ 砥石 | ■ 石錘 | ■ 石皿 | ■ 敲石 |

食料残滓

動物では哺乳類の陸上動物骨のシカ、イノシシに偏っているといわれているが、他にイヌ、タヌキ、ツキノワグマ、キツネ、ノウサギ、イタチ、テン、ムササビ、ニホンカワウソ、モグラ類等があり、海獣のニホンアシカ、クジラ等、鳥類はアビ科、アホウドリ、ウ科、カモ科、キジ科等、爬虫類ではヘビ、ウミガメ科等、硬骨魚類マダイ、クロダイ、スズキ、サバ、ヒラメ、ニシン、コイ、サケ科、フグ科等が確認されている。

小山崎遺跡では動物遺体が伴う東北地方の諸遺跡と比較するとニホンジカとイノシシの割合が突出している。



イノシシ	廃棄場	水場	12h・18IV	18 I
頭	122	0	69	0
歯	242	52	54	50
体幹	26	0	6	0
主要四肢骨	81	1	33	0
四肢骨末端部	46	4	31	3

ニホンジカ	廃棄場	水場	12h・18IV	18 I
角	48	8	2	8
頭	137	3	23	3
歯	390	84	26	82
体幹	79	0	21	0
主要四肢骨	299	16	35	10
四肢骨末端部	156	17	29	16

植物では。後期前葉のものうち利用痕跡のある種実ではオニグルミ、クリ、コナラ属、ブナ科、トチノキが出土し、炭化した種実破片も出土した。1個であるが炭化したニワトコ属も出土している。また、栽培の可能性があるヒエ属とアサ、ゴボウ近似種が出土し、ヒエ属は比較的個数が多かった。利用の可能性がある種類では未炭化のニワトコ属やエゴノキとハクウンボクも出土し、ほかにクワ属、カラスザンショウ、ヤマブドウ、ヤマボウシ、マタタビ、サルナシも出土したが、いずれも少量であった。7

後期中葉では栽培の可能性があるヒエ属とアサが出土し、利用痕があるオニグルミ、クリ、ブナ科、トチノキが比較的多く出土した。利用の可能性がある種類で

はニワトコ属、クワ属がやや多く、エゴノキの破片も多かった。サンショウ、カラスザンショウ、ヤマボウシも破片で出土し、マタタビ、サルナシも出土した。

分類群名	部位/湿重(g)	後期前葉		後期中葉		後期中葉		後期前葉 ~中葉	
		年代	3650±20	3510±20		3445±20			
		区	III	III	III	III	I	I	III
		地点ほか	SB4	T1	北壁	北壁	東壁	東壁	T1
層位	VII	VII	V層F6	V層F4	V	IVa-1	VI		
体積(cc)	150	180	300	200	300	180	210		
体積(cc)	130	200	320	230	320	230	322		
栽培の可能性が高い種類									
ヒエ属	穎果	1	4	18	-	-	1	5(2)	
アサ	果実	(1)	1(2)	-	-	-	-	1(1)	
ゴボウ近似種	果実	-	-	-	-	2	-	-	
利用痕のある種類									
オニグルミ	内果皮破片	(3)	(17)	-	-	(4)	-	(15)	
	内果皮炭化破片	-	-	-	(2)	(3)	(64)	-	
クリ	果皮破片	(16)	(59)	-	-	(14)	-	(23)	
	果皮炭化破片	-	(7)	-	-	-	-	(3)	
コナラ属	果実基部破片	(1)	(1)	-	-	(1)	-	-	
ブナ科	果皮破片	(80)	-	(3)	-	(3)	-	(105)	
	果皮炭化破片	-	-	-	-	(5)	(2)	-	
トチノキ	種皮破片	(1)	(33)	(3)	-	(8)	-	(34)	
	種皮炭化破片	-	(17)	-	(5)	(2)	(6)	(21)	
	子葉炭化破片	-	-	(1)	-	-	-	-	
	幼果	-	1	-	-	-	-	-	
ニワトコ属	炭化内果皮	-	-	-	-	1	-	-	
利用の可能性がある種類									
ミズナラ	穀斗破片	-	-	-	-	-	-	(1)	
	幼果	1	-	-	-	-	-	-	
コナラまたはミズナラ	穀斗破片	(1)	(6)	-	-	-	-	-	
ヒメコウゾ	内果皮	-	-	-	-	-	-	1	
クワ属	種子	3	11	6	-	9	-	13(5)	
サンショウ	内果皮	-	-	-	-	-	-	1(5)	
カラスザンショウ	内果皮破片	(1)	2(5)	-	-	(4)	-	(5)	
ヤマボウシ	種子	-	-	-	-	1	-	1(3)	
ヤマブドウ	種子	-	-	-	-	1	-	-	
ブドウ属	種子破片	-	(2)	(1)	-	(1)	-	-	
マタタビ	種子	-	3	-	-	-	-	4	
サルナシ	種子	1	2	-	-	-	-	4	
エゴノキ	内果皮破片	(1)	(10)	-	-	-	(8)	(22)	
ハクウンボク	内果皮破片	-	(5)	-	-	(1)	-	-	
ニワトコ属	内果皮	3	16	-	4	29	3	37(17)	
種実以外を利用する可能性がある種類									
タラノキ	内果皮	1	-	-	1	1	8	2	
コシアブラ	内果皮	-	-	-	-	-	-	-	
沈水植物									
スブタ	種子	1	-	-	-	-	-	-	
浮水植物									
ヒシ属	刺状突起	-	-	-	-	-	-	-	
浮葉植物									
ガガブタ	種子	-	-	-	-	-	-	(1)	
ヒルムシロ属	内果皮	-	-	-	-	-	-	1	
抽水植物									
コウホネ属	種子	-	-	-	-	-	-	1	
イグサ属	種子	-	-	1	-	-	-	-	
ガマ属	種子	-	-	-	-	-	-	-	
ウキヤガラ	果実	-	-	-	-	-	-	-	
ホタルイ属	果実	53	101	2	-	9	-	56	
ハリイ属	果実	-	1	17	-	12	-	5	
ミズオトギリ	種子	-	1	-	-	-	-	-	
湿性植物									
ハンノキ	果苞	1	12	-	-	-	-	3	
	果実	1	-	-	-	2	-	1	
	果軸	-	1	-	-	-	-	-	
ヤナギタデ	果実	1	3	40	-	9	-	2	
ミゾソバ	果実	-	-	2	-	-	-	-	
ミズ属	種子	1	1	-	-	-	-	-	
セリ属またはドクゼリ属	果実	-	-	6	-	1	-	-	
シロネ属	果実	1	-	1	-	-	-	-	

骨角器には刺突具や釣針、ヤス状の刺突具、湾曲刺突具などが出土している。

木製品には建築部材があり、生活用具や、容器、漆器がある。装飾品も一般の遺跡で出土する石製品や土製品に加え、植物や動物骨でつくられたものがあった。これには、垂飾状歯牙、管状垂飾品などがある。

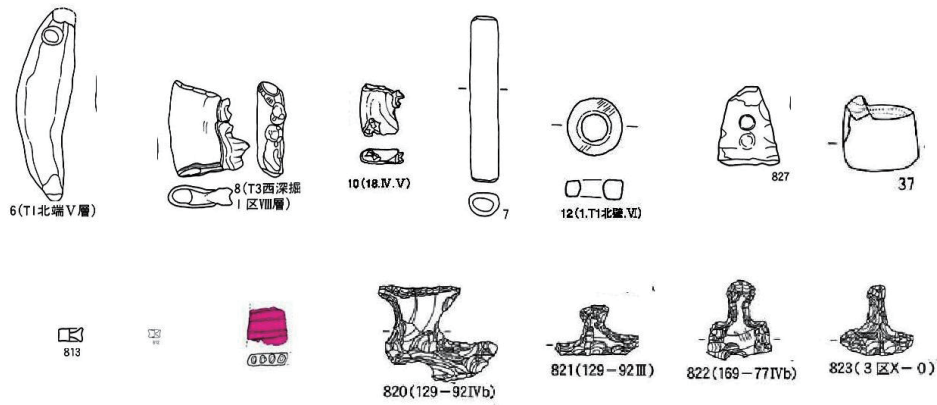
時期区分	土器型式 (最終層形成期)	木製品 分類	出土地の性格と主要な木製品	
中期 後期	未葉 中葉	大木9式 加曾利B3式 併行期	<p>石敷作業場</p>	
			<p>石敷と粘土による道路部 (木製品)</p>	
			<p>石敷と粘土による道路部 (漆器)</p>	<p>水辺遺構西側隣接地</p>
			<p>木製品(1) (素材含む)</p>	<p>木製品(2) 漆塗木製品</p>

S=1:2 (29) S=1:4 (16, 17, 18, 27, 30, 31, 32)
 S=1:8 (22, 23) S=1:12 (4, 5, 7, 8, 19, 20, 24, 25, 26, 28)
 S=1:24 (2, 3, 6, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 21) S=1:32 (1, 15)

小山崎低地の木製品・漆器 (1)

時期区分	土器型式 (最終層形成期)	木製品 分類	出土地の性格と主要な木製品
中期 後期	末葉 中葉	大木9式 加曾利B3式 (併行期)	<p>低湿地西部の廃棄場(台地に沿う浅い沢:18次IV区を除く)</p> <p>6 (3.B146-93.VIa) RW6 7 (18.I.4.V) RW226 8 (18.I.4.V) RW121 9 (3.F8.VI) RW62 10 (1.T1北端.V) 11 (1.T1北端.V) 12 (3.F7.VI) RW28 13 (3.F8.VI) RW22</p>
			<p>漆器と糸玉</p> <p>14 (18.I.3.V) RW216 15 (2.B.VIb) RW1130 16 (3.F10.VI) RW7 17 (1.T3西深1.VI) 18 (3.F10.VI) RW70 19 (18.I.4.V) G151</p> <p>S=1:1 (16,19) S=1:8 (13) S=1:4 (8,10,11,12,14,15,18) S=1:12 (7,17) S=1:6 (1,2,3,4,5,9) S=1:24 (6)</p>

小山崎低地の木製品・漆器 (2)



小山崎遺跡の骨角器と装飾品

小山崎遺跡の生業と文化

時期	集落の様相	生業の特長		道具の特徴		漆文化	信仰・葬制・景観	遠隔地交流 石材・土器	
		動物利用(狩猟と漁労)	植物利用(採集・栽培可能性)	石器・石製品	骨角器・木製品				
後・晩期	・低湿地西部の水辺遺構の構築と運動した形で斜面地に集落が立地。水辺の作業空間と集落域が近接した集落が成立。	狩猟 ・ニホンジカ・イノシシ利用を主体に。鳥類(アホウドリ科、ウ、ガモ類、ワシ類)も利用。テヌキ、イヌ、イタチ・ニホンカワウソウ、テン、ノウサギ、ツキノワグマ等イノシシ、ニホンジカの主要四肢骨は鹿場。本辺遺構付近は利用の最終段階。	採集 【産葉場】利用域のあるオニグルミ、クリ、トチノキは、産葉場近くで採集。【水辺遺構】オニグルミ、クリ、コナラ風、ブナ科、トチノキを出土。炭化種実破片も出土。利用の可能性のある種類ではニワトコ、クワ、クワ、ヤマボウシ、ヤマボウシ、ヤマボウシ等出土。	打製・磨製石器 【水辺遺構】加工具の削器、管状石器多く、狩猟具の石鏃少数。V層で産出。磨製石斧破片はIV層で増加。磨製石斧破片は、後、晩期を通し多い。異形石器の増加。	骨角器 ・生産用具と呪術・装飾用具に分類(産葉場)。漁業で使用された逆刺付刺突具や釣針が存在。	漆文化 【木胎漆器】・独創的な舟形漆器、や結菌式飾等の漆工芸が開花し、高度な塗工例りもの技術や重ね塗り技法の他、漆精製工程を示す漆工用具も出土。 【漆器土器】・赤・黒に鮮やかに塗り分けられた(注)口土器等)が存在。	漆文化	葬制や祭祀用具の増加 ・火葬の痕跡を示す椎骨の焼骨 ・水辺遺構や産葉場の祭祀用具は、狩猟や水辺の信仰にかかわる祭具の存在を想起。	石器・土器 石器石材 ・遠隔地産石材(A・B類) 珪質頁岩や黒曜石)流通(活発化)。男鹿(信州「星ヶ塔」産黒曜石。とスエ。
		漁労 ・沿岸域(タイ科、アイナメ科、ニシン科、サメ類等) 魚類や汽水域(スズキ科・ボラ科等)、淡水域(トゲウオ科・コイ科等) など多様な環境資源を利用。 ・【特筆点】蚌骨の出土(蚌の産卵床に隣接する遺跡)	クリ・トチノキ林の管理と栽培可能性植物 【産葉場】アサ、ヒエ風は出土しない為、獣骨などの影響で分解された可能性。【水辺遺構付近】アサ、ヒエ風、ゴボウ近似的種が水城著りに出土。ヒエ風は個数多く確認。加熱処理後の調理具を水城で発見可能性。【クリ・トチノキ林の管理】後期初頭〜前葉はクリ林が優勢、後期前葉〜中葉にかけてトチノキ林が拡大、晩期にはクリが減少してトチノキ林が拡大。	礫石器 【水辺遺構】敷石作業場で石皿と磨石のセメント出土。磨石も多数確認。磨石も多用。石鏃は中高石皿を使用。石鏃の小型化。 【居住域】石皿の他、漁業関連の石鏃・浮子が出土。	木製品 ・捨場の出土は少なく水辺遺構に集中。(大型部材・加工材)と(木製品)に大別。現在、貯化場で使用される魚叩き桶の類似遺物の存在。櫛木製品の出土は舟の存在を示唆。	土器 ・東北北部の十勝内I・II群や関東の堀之内I・II群併存期の土器等、広範囲の土器形式の影響を確認。			

庄内地域の縄文時代後期編年表

暦年補正年代	時代	器種・形式	庄内南部	庄内北部
約3,900年前		宮戸1b古袖窪		八幡原No.31-I(米沢市)
		堀之内1	野新田	八幡原No.31-II(米沢市)
		堀之内2		八幡原No.31-III(米沢市)
		加曾利B1	谷定	左沢I(米沢市)
約3,500年前	後期	加曾利B2		的場I(西川町)、左沢II(米沢市)
		加曾利B3		左沢III(米沢市)
		新地1	砂川A、谷定	的場II(西川町)
約3,300年前		新地2	砂川A、谷定	的場III(西川町)
		新地3	砂川A、谷定	的場IV(西川町)
		新地4	砂川A、谷定2、谷定	的場V(西川町)、町下(飯豊町)